

千葉県中近世城跡研究調査報告書

第 7 集

—飯櫃城跡・鎧木城跡発掘調査報告—

昭 和 61 年 度

財団法人 千葉県文化財センター

研 究 部

序 文

千葉県内には、数多くの中近世遺跡が所在し、それらにまつわるさまざまな史実伝承も伝えられています。

このような中近世遺跡について千葉県教育委員会では、それらの実態を把握するため昭和45、46年度に中近世遺跡の分布調査を実施しました。その結果、県内に586か所の所在を確認し、「千葉県中近世遺跡調査目録」として刊行しました。城館跡に関しては、文献史料による研究がかなり進められておりますが、規模・構造・性格等の実態調査はほとんどおこなわれていないのが実情です。また、県内の都市化に伴う開発等も加速的増加の傾向を示しております。

そこで、千葉県教育委員会では、昭和55年度から第一次5か年計画、昭和60年度から第二次5か年計画で、中近世城館跡のうち重要性が高くかつ開発等の影響を受ける恐れがあるものを選び、その規模、構造等を把握し保存及び活用を講ずる資料を得る目的で、測量・確認調査を実施してきました。

今年度は、芝山町飯櫃城跡・干潟町鏑木城跡の2か所について調査を実施し、主要部について、規模・構造等を明らかにすることができました。

このたび、その発掘調査成果を調査報告書として刊行する運びとなりました。本報告書が学術的資料としてはもとより、文化財の保護・活用のため広く一般の方々にも利用されることを期待しております。

終りに調査にあたり多大な御協力をいただいた芝山町・干潟町両教育委員会をはじめ地元関係者の方々、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの職員及び調査補助員の方々の御苦労に対し、心から感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

千葉県教育庁文化課長
竹内一雄

例　　言

1. 本書は、山武郡芝山町飯櫃所在の飯櫃城跡及び香取郡干潟町鏑木所在の鏑木城跡の確認調査概要報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて、調査を讐千葉県文化財センターに委託し実施したものである。
3. 調査は、飯櫃城跡が昭和61年10月13日～10月18日、鏑木城跡が昭和61年10月20日～10月31日まで実施した。なお、地形測量は業者委託で実施した。
4. 調査及び整理作業・報告書作成作業にあたっては、研究部長 鈴木道之助、部長補佐 渡辺智信・古内茂のもとに調査研究員 柴田龍司が担当した。
5. 執筆は柴田龍司が担当した。
6. 調査の実施にあたって、飯櫃城跡については、芝山町教育委員会の関係者各位、土地所有者木内國雄氏・半田幾喜氏、並びに地元飯櫃地区の御協力があった。また、鏑木城跡については、干潟町教育委員会の関係者各位、土地所有者実川博氏・椎名寛氏、並びに地元鏑木地区の御協力があった。各々記して謝意を表します。
7. 飯櫃城跡及び鏑木城跡出土の陶磁器については、国立歴史民俗博物館助教授 小野正敏氏に鑑定していただいた。
8. 鏑木城跡出土の金属溶解物については、国立歴史民俗博物館助教授 永鶴正春氏に科学分析をしていただいた。
9. 本書に使用した方位は全て座標北である。
10. 調査の実施及び本書をまとめるにあたり、下記の方々により種々の御教示、御高配をたまわった。各々記して謝意を表します。
八角静氏（芝山町中央公民館館長）・佐久間勇氏（芝山町教委）・鏑木太郎氏（干潟町公民館館長）・古橋謙寿氏・菅谷慶一氏（干潟町教委）・半田保氏・秋葉栄氏・渡辺健治氏・干潟町農村環境改善センター

目 次

序文

例言

I 芝山町飯櫃城跡

1. 飯櫃城跡の位置と地理的環境.....	1
2. 飯櫃城跡の歴史的環境.....	2
3. 飯櫃城跡の概要.....	7
4. 発掘調査とその概要.....	14
(1) 調査方法と調査経過	
(2) 調査区の概要	
5. 結語.....	20

挿 図 目 次

I-1図 飯櫃城跡と周辺の主要城跡位置図.....	3
I-2図 飯櫃城跡周辺地形図.....	5
I-3図 飯櫃城跡地形測量図.....	9
I-4図 飯櫃城跡概念図.....	11
I-5図 飯櫃城跡根古屋地区発掘区平面・土層断面図.....	15
I-6図 飯櫃城跡 I郭発掘区平面・土層断面図.....	18
I-7図 飯櫃城跡出土遺物実測図.....	19

図 版 目 次

図版 I-1 飯櫃城跡航空写真
図版 I-2 飯櫃城跡遠景
図版 I-3 飯櫃城跡遠景、高谷川中・下流域
図版 I-4 根古屋地区西部、I郭櫓台と空堀A
図版 I-5 空堀A、II郭張り出し部、III郭西端土塁
図版 I-6 I郭Dトレンチ・Eトレンチ
図版 I-7 根古屋地区Aトレンチ・Bトレンチ
図版 I-8 根古屋地区B・Cトレンチ
図版 I-9 根古屋地区Aトレンチ検出遺構
図版 I-10 飯櫃城跡出土遺物

II 干潟町鍋木城跡

1. 鍋木城跡の位置と地理的環境.....	45
2. 鍋木城跡の歴史的環境.....	46
3. 鍋木城跡の概要.....	50
4. 発掘調査とその概要.....	58
(1) 調査方法と調査経過	
(2) 調査区の概要	
5. 結語.....	66

挿図目次

II-1図 鍋木城跡と周辺的主要城跡位置図.....	47
II-2図 鍋木城跡周辺地形・外郭部概念図.....	49
II-3図 鍋木城跡地形測量図.....	51
II-4図 鍋木城跡概念図.....	53
II-5図 鍋木城跡 I・II郭発掘区平面・土層断面図.....	59
II-6図 鍋木城跡 I Cトレンチ平面・土層断面図.....	61
II-7図 鍋木城跡 I Bトレンチ検出粘土敷遺構実測図.....	63
II-8図 鍋木城跡出土遺物実測図.....	64

図版目次

図版II-1 鍋木城跡航空写真
図版II-2 鍋木城跡遠景, 干潟耕地(旧椿海)北西部
図版II-3 空堀A・空堀B
図版II-4 I Cトレンチ(北)
図版II-5 I Cトレンチ(南)
図版II-6 I Bトレンチ(北)・粘土敷遺構
図版II-7 II郭調査区
図版II-8 鍋木城跡出土遺物

I 芝山町飯櫃城跡



千葉県

I 芝 山 町 飯 檜 城 跡

1. 飯櫃城跡の位置と地理的環境 (I-1, 2図)

飯櫃城跡は、山武郡芝山町飯櫃に所在する。成田空港南端から南東へ約3kmの位置にあり、国鉄バス飯櫃停留所の真上の台地が城跡である。

この地域は、上総北半（市原市と千葉市土気地区を結ぶライン）から下総に拡がる標高30～40mを中心とした下総台地といわれる地形である。下総台地は河川流域沿いの谷と、そこから複雑に開析した支谷により、無数の舌状台地が形成されている。下総地域の大部分の城跡はこのような舌状台地に占地しており、飯櫃城跡もその例外ではない。

城跡は、佐原市南西部あたりを源流にし、香取郡栗源町・多古町、山武郡横芝町などを経て九十九里浜で太平洋に注ぐ栗山川水系に属し、栗山川の中流で多古町、横芝町、匝瑳郡光町の町境が接する地点に合流する高谷川流域の中流に位置している。太平洋に注ぐ周辺の河川にもいえることであるが、高谷川流域は支谷が西側（右岸）に発達しており、城跡は南側を芝山町朝倉地区に延びる3km程の支谷で、北側を1km程の支谷でそれぞれ開析された、西から東に延びた舌状台地の先端部に占地している。標高は40m前後を測り、周辺の台地上との比高差はほとんど同レベルである。

高谷川流域には、次章でも述べるが、現在飯櫃城跡も含めて6ヶ所の中世城跡が確認されるが、小原子城跡が流域東側（左岸）に位置する他は、全て流域西側（右岸）に位置している。支谷が西側に発達している点と共に、支谷内での農業生産活動と集落との関係からくるものと思われる。飯櫃城跡からは、小原子城跡を視認することが出来、また大台城跡と山中城跡の間にも遮る地形がないため、城として機能していた時点では視認が可能であったと思われる。

現在の城跡は、台地上は大部分畠地で、一部山林となっている。斜面部は山林からなっており、また高谷川に面した部分は急傾斜地崩壊危険区域に指定されているように急崖になっている。部分的に斜面の崩壊や、後世の改変により遺構の破壊が認められるものの、基本的な遺構の遺存状況は非常に良好であり、中世城郭としては築城技術の上で最新の形態を示し、完成度の高いものである。さらに、台地上の大部分が畠地であることから、大変見学しやすい城跡といえるであろう。中世城郭を身をもって理解する上で格好の城跡である。また芝山町内には遺存状況が良好な城跡が多くあり、それらの城跡も含めて研究されるならば、当地域の戦国時代の解明に役立つものと考えられる。

2. 飯櫃城跡の歴史的環境（I—1図）

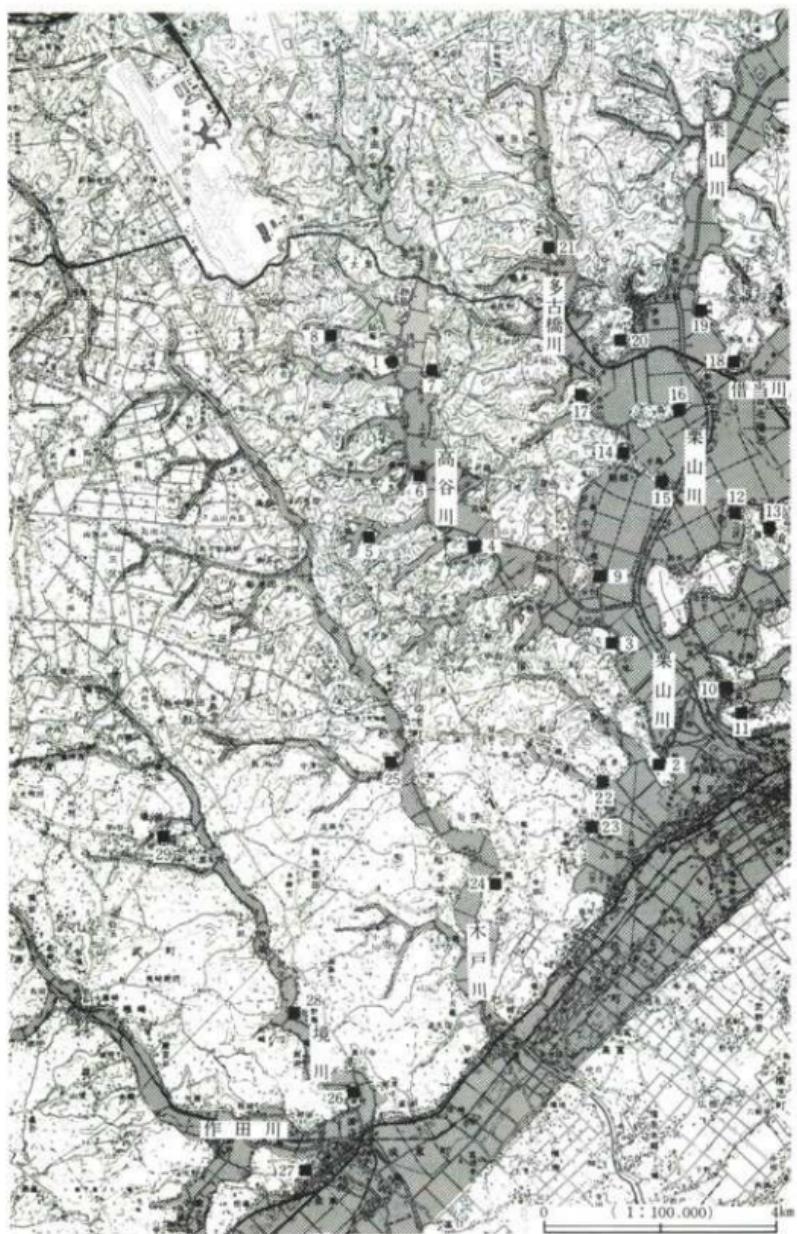
飯櫃城跡の所在する山武郡芝山町は、古代においては町域の北部が上総国武射郡加毛郷、南部が同郡新居郷に比定されている。中世においては、町域南部（旧二川村）は上総国武射郡山辺荘に属しており、飯櫃地区を含む北部（旧千代田村）は確証はないが下総国千田荘に属していたといわれている。^{註1}

飯櫃城跡の歴史については、天正19年（1591）に松戸市平賀にある本土寺過去帳に「飯櫃」の地名が認められるのが、今のところ初見であり、その以前の戦国時代の史料ではなく、無論飯櫃城の確実な文献史料もない。しかし、後述するように、城跡の縄張り（形態）や発掘調査の成果から、当城跡が戦国時代末期に機能していたことが確実なことから、飯櫃城跡周辺の戦国時代史について概観し、また周辺の中世城跡について触れてみることとした。

戦国時代（特に16世紀後半）には、飯櫃城跡の東側を流れる高谷川が栗山川に合流する地点から南に2.5km行った舌状台地に占地する坂田城跡（I—1図・2）を本城とした井田氏が、栗山川及び高谷川流域を中心とした地域を領有していた。井田氏は、「安得虎子」所収の「小田原一手役之書立」^{註2}や「毛利家文書」の「北条家人數付」^{註3}に見え、遅くとも天正18年（1590）頃には確実視されている。また伊藤一男氏が井田氏について精力的に取り組んでおられる。井田氏の出自及び動勢については、確認出来る史料はなく、僅に宝曆6年（1756）に書かれた『總州山室譜伝記』^{註4}に記述されているだけである。それは、栗山川及び高谷川流域を主な舞台にした軍記物であり、全てを史実とみると到底無理ではあるが、史料的な制約から触れてみることとする。

『總州山室譜伝記』によれば、井田氏は元々は小田原北条氏の家臣であったが、芝山町小池にある田向城（5）に居城し、天文15年（1546）には同町大台の大台城（6）に移り、永禄5年（1562）に坂田城を本城とした。戦国時代の下総及び上総北半部は、古代末以来の千葉氏とその一族の領有が揺らぎ、16世紀前半から小田原北条氏の領国化が進んでいたが、井田氏も小田原北条氏の直接の家臣であったかどうかは別にしても、小田原北条氏の直接・間接的な援助のもとに、谷津奥の田向城から高谷川中流の大台城、そして栗山川中流の沖積地を望む坂田城へ拠点を移したように、急速に領域支配を拡大していったのである。そして「安得虎子」や「毛利家文書」にみられるように、戦国時代末期には下総・上総を代表する在地領主に成長していた。しかし、下総・上総で小田原北条氏についていた在地領主の全てについていえることであるが、天正18年（1590）豊臣秀吉によって小田原北条氏が滅亡すると同時に運命を共にすることとなった。

次に飯櫃城の歴史についても『總州山室譜伝記』に多く記述されており、それによれば、山武郡松尾町山室を根拠地とした山室氏が、天文元年（1532）に飯櫃城を築城し、以後3代に亘って山室氏の本城としていたが、井田氏同様天正18年（1590）に滅亡している。井田氏との関



I-1図 飯櫃城跡と周辺の主要城跡位置図
(国土地理院「成田」「東金」1:50,000使用)

係は、井田氏が田向城や大台城に居城していた時点では同格の在地領主層であったが、坂田城に移った後は、独立性は強いものの井田氏の重臣的な位置にあったものと考えられる。

ところで、下総の地域は全国的にみても中世城跡が多く分布しており、大字単位に最低一ヶ所は存在していたようである。全ての中世城跡が同一時期に機能していたとは思われないが、大部分は16世紀後半に併存していたであろう。そのことは、戦国期下総において、一円領主的な戦国大名が成長せず、個々の在地領主層の独立性が強かった証しであると考えられる。その中でも井田氏の領域においては、中世城跡が多く認められ、井田氏の家臣が各々城郭を構えていたが、それぞれの城郭が個々に機能を果していたわけではなく、坂田城を中心とした本城一支部網関係が形成されていたと思われる。

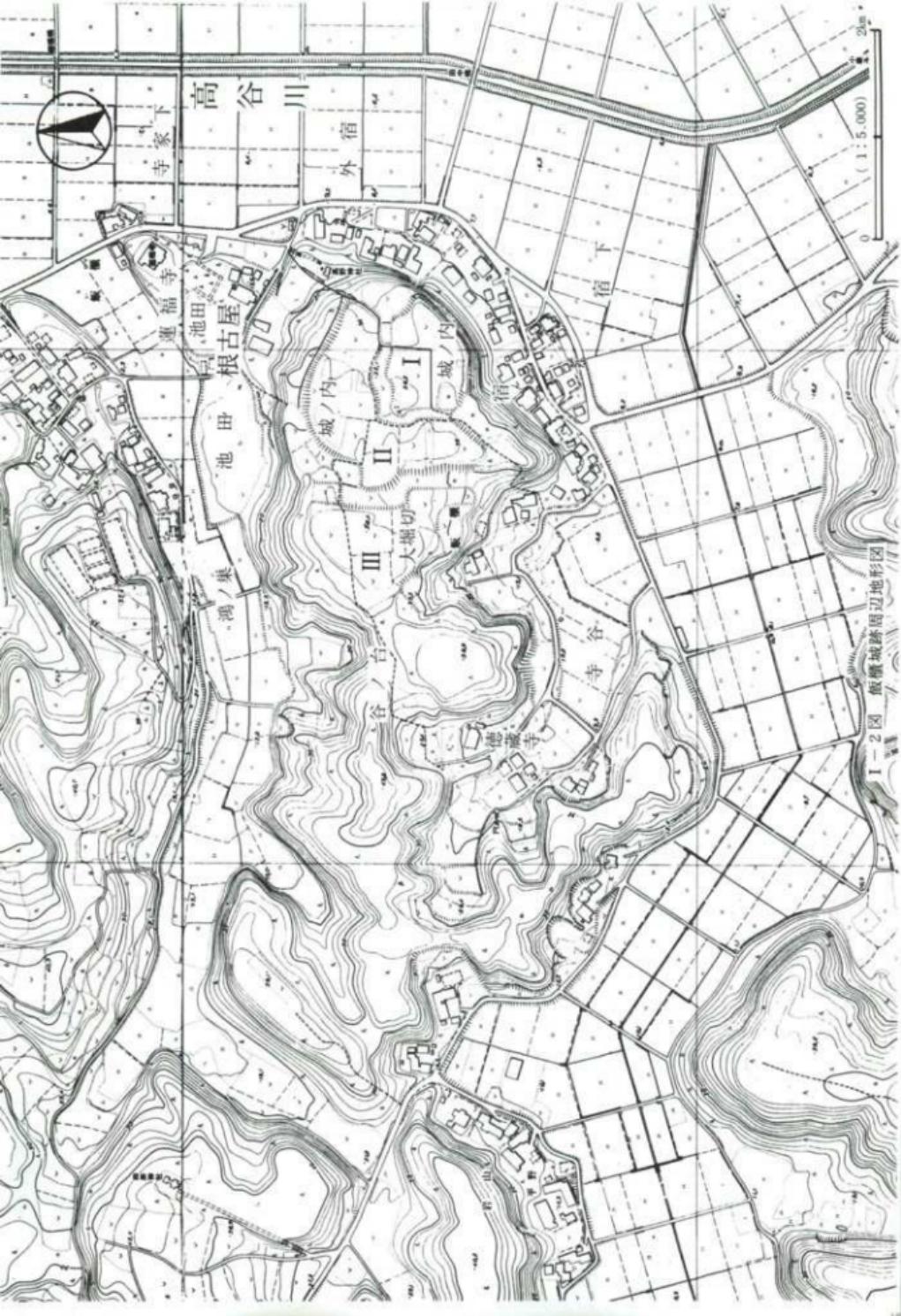
まず、井田氏の本城である坂田城（I-1図・2）は、1982年千葉県教育委員会によって城跡^{註6}全城の測量調査と部分的な発掘調査が実施された。現状は、南北600m、東西250mの規模を有し、5ヶ所の郭から構成され、二重土塁や張り出し部など中世城郭としては完成された繩張りを持っている。周辺には傍示戸城跡(10)、田中砦跡(11)、長倉砦跡(22)、八田砦跡(23)などがあり、坂田城防衛網に組み込まれていたものと思われる。小堤城跡(3)は現在土取りで破壊されてしまったが、伊藤一男氏の研究によれば、規模的にはそれ程大きくはないが、繩張りは複雑である。位置的にみて、高谷川が栗山川に合流する地点にあり両河川流域を望むことが出来、また坂田城の基部にあることから、坂田城の支城群の中では重要視されていたものと考えられる。

次に高谷川流域に目を向けてみると、山中城跡(4)、田向城跡(5)、大台城跡(6)、飯櫃城跡(1)、小原子城跡(7)、岩山城跡(8)が分布している。山中、田向、大台の各城跡は飯櫃城跡とほぼ同規模であり、各々複雑な繩張りをしている。山中城跡は和田氏の居城といわれ、飯櫃城の山室氏同様井田氏の重臣層であったと思われる。城跡は大きく3ヶ所の郭からなり、特に外側の郭は元々支谷内に築かれたのか、不利な地形を克服するため大規模な土塁を複雑に巡らしている。田向城跡は恐らく県内で最も完成された中世城郭であると共に、最も保存状況が良好な城跡であろう。井田氏は田向城→大台城→坂田城と移ったとされるが、繩張りからみる限り井田氏が滅亡近くまで改築を行なっていたものと思われ、それだけ井田氏が重要視していたのであろう。大台城跡は台地上は耕作化と貯水施設による破壊によって遺存状況はあまり良好とはいえないが、斜面部の腰曲輪は発達しており、また良く残っている。小原子城跡は台地南端に腰曲輪と土塁の一部が認められるのみで、城跡として断定するには確証に欠けるが、小規模な城域と簡単な繩張り、及び飯櫃城跡の対岸に位置することから考えると、飯櫃城の支城と考えることが出来るであろう。岩山城跡は舌状台地基部に占地し、先端部は城域外である。3ヶ所の郭からなり、非常に単純な繩張りであり、基本的には飯櫃城の年代よりも古い繩張りであるが、16世紀後半に改変されることなく飯櫃城の支城に組み込まれたと思われる。

24m

(1:5,000)

I-2 図 佐原城跡周辺地形図



栗山川流域では、牛尾砦跡(9)、篠本要害台城跡(12)、篠本城跡(13)、大島砦跡(14,15)、志摩城跡(16)、城の台城跡(17)、並木城跡(18)、今城跡(19)、多古城跡(20)、大原城跡(21)等が分布する。志摩城跡と多古城跡は康正元年(1455)千葉氏宗家が滅亡した城として有名であるが、多古城跡は現存の空堀の規模、形態からみる限り16世紀後半の繩張りであろう。牛尾砦跡と篠本要害台城跡はヤセ尾根的な台地上に占地しているが、両城跡共に複雑な繩張りではない。他の城跡も、高谷川流域でみられたような規模や繩張りを有するものではなく、確認される城跡は多いのであるが、井田氏支城網の拠点となるような城跡はないようである。これは、井田氏自体が高谷川流域を本貫地としており、栗山川流域は個々の在地小領主層を統合することが出来ないうちに滅亡したためではないであろうか。

木戸川流域にも多くの中世城跡が分布するが、主要な城跡としては蕪木城跡(24)、山室城跡(25)がある。蕪木城跡は、本報告書の後編で述べる鏡木城に居城した鏡木氏と関係があったといわれているが、戦国期には井田氏の領域となっている。城跡は高砂城、最上城、音羽城の3ヶ所からなり、各々繩張りからは時期差があると考えられている。その内、音羽城跡が最も新しい繩張りをしており、支谷を利用した大規模な空堀を備えている。山室城跡は飯櫃城主山室氏の本貫地と思われ、やはり井田氏の領域内に組み込まれていたのであろう。3ヶ所の郭と外郭部からなり、東西400m程の規模を有し、二重土塁が2ヶ所認められる。空堀の規模や屈曲(折垂)、二重土塁の存在から戦国時代末期の繩張りであろう。

境川流域には、作田川との合流点に津辺城跡(26)と成東城跡(27)があり、境川中流域に戸田城跡(28)、八幡城跡(29)がある。津辺城の城主は井田氏の重臣白樹氏であったと伝承されている。城跡には内構形状の虎口(城の出入口)や県内には稀な馬出しがあり、中世城郭としては最も新しい繩張りである。成東城跡は戦国時代には千葉氏一族が居城していたらしく、津辺城までが井田氏の領域であったと思われる。八幡城跡は山武郡山武町埴谷に所在し、上総一本揆の首謀者であった埴谷氏の本貫地である。八幡城跡の近くに埴谷城跡があるが、八幡城跡の方が空堀の規模や腰曲輪にある空堀の有無から新しい繩張りと考えられる。また埴谷地区には井田氏の支配が及んでいた伝承がある。恐らく千葉氏一族と井田氏領域の接点であったであろう。

以上、高谷川、栗山川、木戸川、境川の各流域単位に主要な中世城跡をみて來たが、有力支城の分布からみると、井田氏の領域の中心は高谷川流域をはじめ、栗山川沖積地、木戸川中・下流域、境川下流となるであろう。また、坂田城跡、飯櫃城跡、山中城跡、田向城跡、山室城跡、津辺城跡といった中世城郭として技巧に富む繩張りを有する城跡が多く認められることは、從来房總の中世城郭は後進的といわれている中で、特筆すべき問題であろう。戦国期には小田原北条氏や武田氏が最も築城術において進んでいたことを考えれば、井田氏領域内に多く認められる繩張りの技巧は、「總州山室譜伝記」に述べられているごとく、井田氏が在地支配を起點に成長していったのではなく、小田原北条氏の直臣として入部し、滅亡時まで密接な関係が

あつたため、最新の築城術を導入することが可能であったとも思われる。

また、高谷川流域や境川流域には上流域まで中世城跡が認められるが、木戸川流域には中流域の山室城跡より上流には、現在のところ 1ヶ所も発見されていない。城郭が開発領主の拠点であるならば、木戸川上流の開発の有無・実体について検討せねばならない問題といえるであろう。

註

註 1 千葉県山武郡教育会編 1916 『山武郡郷土誌』

註 2 岩槻市史編さん室 1983 『岩槻市史 古代・中世史料編古文書史料(下) 1187』

註 3 註 2 の 1189

註 4 伊藤一男 1975 『横芝町史』 山武郡横芝町

註 5 芝山町教育委員会 1982 『總州山室譜伝記』

註 6 柳児・加藤正信 1983 『千葉県中近世城跡研究調査報告書第3集』 勧千葉県文化財センター

註 7 八角静 1977 『高砂城跡を含む蕪木城跡について』 『高砂城址』 松尾町教育委員会

註 8 伊藤一男 1984 『松尾町の歴史 上巻』 山武郡松尾町

註 9 小高春雄氏の御教示

3. 飯櫃城跡の概要 (I—2・4図)

北と南を支谷によって区切られた、西から東に張り出した舌状台地先端部に占地する飯櫃城跡は、台地上が先端部から西へ I～III の 3ヶ所の郭と、北東部の根古屋地区から構成される。台地上の城郭遺構が認められる範囲での規模は、東西320m、南北240m、根古屋地区は東西130m、南北190mを測る。主郭である I 郭と周辺との比高差は、水田面で最大32m、根古屋地区では20mを測る。

I郭

小字を「城ノ内」といい、東西107m、南北77m、標高37m前後を測り、台地縁辺に向って若干低くなっているがほぼ平坦な地形である。空堀 A によって II 郭と区画される。北東部が II 郭側に方形に張り出しており(ア)、櫓台が置かれている。頂部は標高41.3mを測り、城跡中最も高所な場所である。ここからは空堀 A の全体を見渡すことが出来る。また北辺中央部には折(イ)が認められ、(ア)と一体視すれば、その間に II 郭との出入口(虎口)を想定出来る。

空堀 A

上幅12～20m、下幅4～11m、I郭からの深さ2.2～4mを測る。近年かなり埋められたらしく、非常に浅い堀跡となっている。(ア)と(イ)により空堀自体も屈曲している。南端で腰曲輪(ウ)となる。(ウ)は南端で段差を境に徐々に高くなる。この箇所は自然地形のようである。先端は斜面崩落のためか削られている。空堀の東端もまた腰曲輪(エ)に続いている。(エ)の北東部に空堀状の落ち込み(オ)が認められる。

II郭

小字をI郭同様「城ノ内」という。I郭の北辺と西辺を囲んでいる。東西170m、南北155m、標高33～38mを測り、南端と東端に向って徐々に低くなっている。空堀BによってIII郭と区画される。西辺中央部にI郭(ア)と同様な張り出し(カ)があり、槽台はないものの、(ア)に比べ大規模である。III郭側に張り出すことによって、空堀Bの全体を見渡すことが出来る。南西端には僅に突き出た箇所(キ)があり、一段下の腰曲輪(ウ)の西端の張り出し(ク)と共に空堀Bに侵入した敵に対する防禦施設(横矢掛り)である。

空堀B

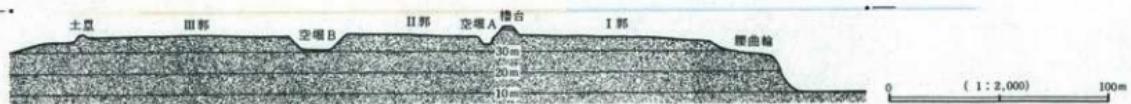
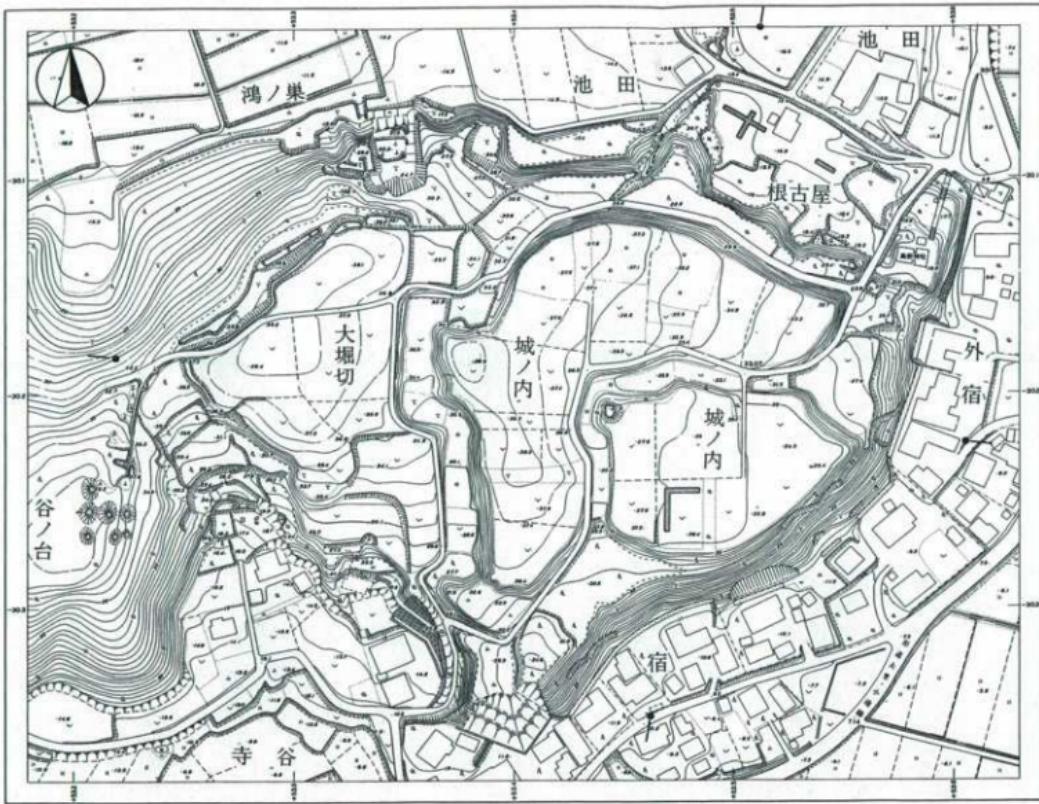
上幅20～25m、下幅10～13m、II郭からの深さ5.5～8mを測り、空堀Aより2倍程の堀幅である。張り出し部(カ)と(ク)の箇所で屈曲している。南端は台地端まで続くが、現状では堅堀とはならない。II郭北辺下では帯曲輪となり、根古屋地区に張り出す(ケ)で幅広となる。またII郭北東端下では、槽台(コ)と土壘状の高まり(サ)が認められる。(コ)と(サ)の間には現在農道があるが、この道は新しいものといわれている。しかし、(コ)と(サ)の遺構から考えると、その間か(コ)の東側に出入口を想定することが出来る。『總州山室譜伝記』では天正18年(1590)に新たに掘られたとある。

III郭

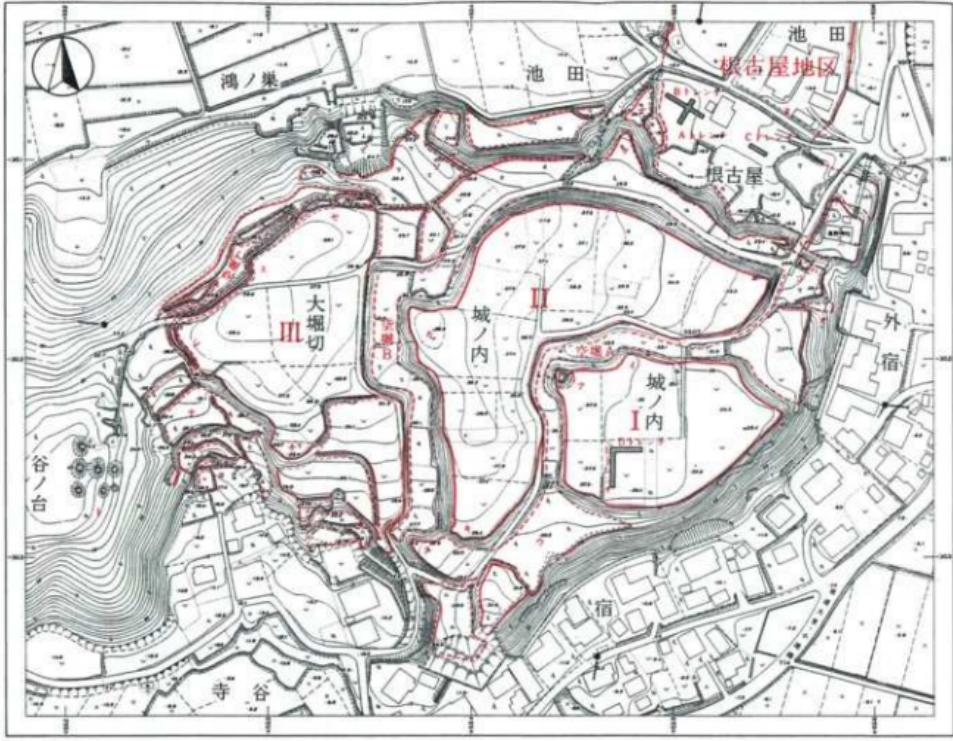
小字を「太堀切」といい、おそらく空堀Bを示したものであろう。東西95m、南北155m、標高29～38mを測り、元來の地形が北と南で傾斜していたのか、段差を造り出すことによって平坦化している。西辺から北西辺に土壠(シ)(ス)が認められる。耕作化と農道のため、内側から削られ本来の規模ではないが、内側から1.5m程の高さを有する。土壠(シ)の外側は城外となる。土壠(ス)は中央部で屈曲している。(セ)で幅広になり跡切れる。土壠(ス)の外側に空堀Cがあり、(ス)から3～3.5mの深さを測る。空堀の外側に一部跡切れるものの土壠状帶曲輪と幅の狭い平坦部が併走している。空堀Cは、城外(西側)に開口し、土壠(ス)の屈曲や(セ)で幅広になり、しかも東側で堀底より一段高くなることを考えると、西側城外からの通路であり、(セ)でIII郭に入ったのであろう。現在は土壠(シ)と(ス)は農道により繋がっていないが、本来は連続していたのであろう。

III郭北東部には、緩傾斜する腰曲輪(ソ)があり、縁辺に土壠がある。土壠下にも腰曲輪がみられる。また、その下には根古屋地区と同レベルの長方形プランの腰曲輪が続く。(タ)は豪農であった池田家の墓地であり、削平地や空堀状の落ち込みが認められるが、墓地造成時の改変があるため、現状では城郭遺構としては断定出来ない。

III郭南辺は大きく張り出し(チ)、(テ)の腰曲輪群を見下ろしている。(ツ)も(チ)ほどではないが、張り出しており、やはり東下の腰曲輪を見下ろす位置にある。(テ)の腰曲輪群は8段に分かれ、谷津奥に続いている。谷津からIII郭西側に侵入しようとする敵に対する防禦施設であ



I-3図 燐櫓城跡地形測量図



I-4図 鰐籠城跡概念図（I-1図と同じ位置）

ろう。しかし、腰曲輪群(テ)の西側は自然地形に接しているので、その方面的防禦は弱いことから、防禦施設以外の機能も考えてみる必要がある。(ト)は墓地脇に規則的な配置をした塚群である。性格は不明であるが、形状からみて中世まで遡らないと思われる。土壘(シ)と塚群(ト)及び墓地の間は人為的に削平されているが、土壘(シ)下には現状でみる限り空堀を確認することは出来ない。

根古屋地区

II郭北東下に東西130m、南北190mの規模で、三角形プランを呈し、周辺の水田面より2～5m程高くなった地区がある。木内國雄氏宅地を小字「根古屋」、道(ヌ)より北を「池田」という。ここでは、字「池田」も含めて根古屋地区として捉えている。標高14～18mで先端に占地する蓮福寺に向って徐々に低くなる。字「根古屋」の東・西端には台地上から続く張り出し部がある。西側は(ケ)の張り出しの下に2段の平坦地(ナ)がみられ、字「根古屋」より1.5～3m程高い。東側は現在高野神社が建っている所(ニ)で、櫓台(コ)の下から張り出し、字「根古屋」より1.5m程高い。(ケ)・(ナ)と(ニ)の張り出しが字「根古屋」地区を防禦する土壘の機能を果していたのであろう。

なお、(ニ)西側の落ち込みは近年の土取り跡、(ヌ)の道路は廃城後のものと思われ、根古屋地区は字「根古屋」と字「池田」が一対のものであった。

周辺の小字名

城跡北側に「根古屋」「池田」「鴻ノ巣」が、東側に「外宿」、南側に「宿」「寺谷」、台地上城外に「谷ノ台」がみられる。この内、城郭と関係が深いものは、「根古屋」「外宿」「宿」であろう。「池田」は近年まで「根古屋」の西側で屋敷を構えていた池田家からきた小字名で、寺谷は徳蔵寺からきた小字である。

「外宿」「宿」の地区も、根古屋地区同様水田面より若干高位な場所であることからも、飯櫃城に伴う集落があったものと思われる。またIII郭南下の谷津部は(テ)の腰曲輪群からみて、やはり集落地であったろう。

根古屋地区も無論集落地ではあるが、「外宿」や「宿」地区と違い、両端を張り出し部(ナ)(ニ)で防禦されている点と、(ナ)→(ケ)及び(ニ)→(コ)を伝わって台地上に登り易いことから、ここに城主(『總州山室譜伝記』では山室氏)の居館があったものと思われる。

4. 発掘調査とその概要（I—4～7図）

（1）調査方法と調査経過

発掘調査は、昭和61年10月13日から10月18日の6日間実施した。まず、字「根古屋」の木内國雄氏宅地（以後根古屋地区と呼ぶ）とI郭内の半田幾喜氏所有地（以後I区と呼ぶ）の発掘区設定を行なった。

根古屋地区は地形に沿って十文字に直交する2m×14mのAトレンチ、2m×22mのBトレンチ、及びBトレンチ延長上に2m×10mのCトレンチを設定した。なお、A・Bトレンチが直交する2m×2mの範囲は未発掘である。I区も郭縁辺部のラインに沿って直角に交わる2m×16mのDトレンチ、2m×20mのEトレンチを設定した。

発掘調査は、まず根古屋地区から始め、全てのトレンチを表土層から手掘りで掘り下げた。発掘と平行して、遺構実測、記録写真撮影を行い、それらの作業が終り次第埋め戻し作業を行なつた。10月18日には全ての作業が完了した。

発掘面積は、根古屋地区84m²、I区68m²、計152m²である。

（2）調査区概要

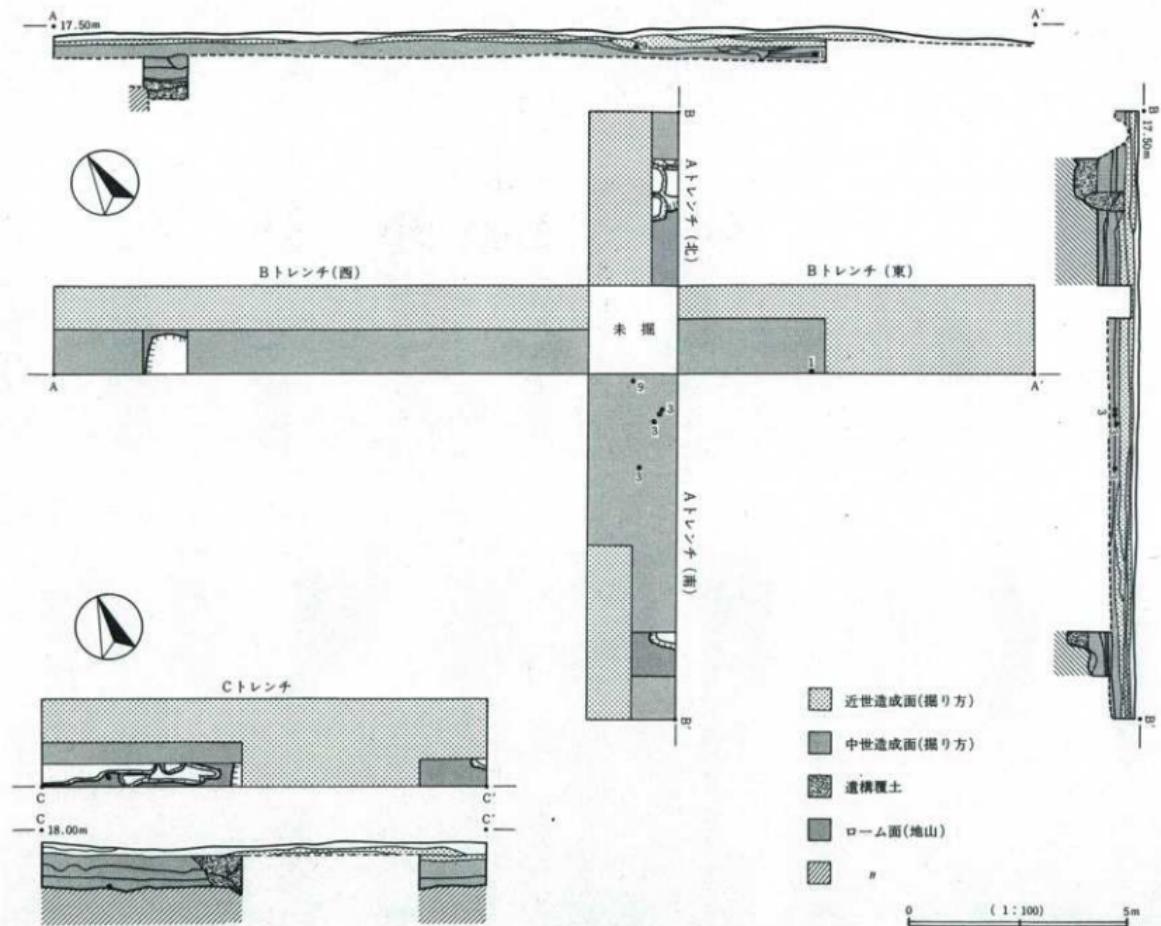
①根古屋地区

土層 A・Bトレンチ内では、表土層を剥がすと、ソフトローム・ハードローム・灰白色砂土のブロックを築き固めた層が、10～20cmの厚さで認められた。この層の最上面には礎石があり、近年取り壊された木内家の旧宅のものである。木内家の伝承では元禄10年（1697）の大地震で建物の一部が倒壊したといわれている。後述するように、出土陶磁器の年代からみて礎石がのる造成面は近世の所産であろう。

近世造成層の下からは、60～70cmの厚さで①暗灰色砂質土（ハードローム粒微含）、②暗灰褐色土（ハードロームブロック中含）、を版築状に築き固めた層が認められた。この層中からは、近世陶磁器は全く混らず、全て中世陶磁器で占められていることから、中世に造成された層であろう。なお、A・Bトレンチ内では、中世造成層が厚く、しかも調査期間の制約から、25m²分を中世造成層中位までしか調査が出来なかった。

中世造成層下には、地山層であるハードローム層が認められた。ハードローム層を検出した範囲は3ヶ所で僅か3.5m²分である。現表土面から0.9～1.2m下である。

Cトレンチ内では、A・Bトレンチで検出された近世造成層の続きと思われる灰白色砂土を築き固めた層が表土層の下にあり、さらに下層で①暗灰色土（ハードロームブロック少含）、②灰褐色土（ソフト・ハードロームブロック中含）を互層に築き固めた層が70cm程の厚さで認められた。土質・色調・混入物からA・Bトレンチで検出された中世造成層の続きであろう。



I - 5 図 細櫛城跡根古屋地区発掘区平面・土層断面図

遺構 A・Bトレンチでは、中世造成層を掘り込む遺構は、Aトレンチ(北)の中程で、土層断面にみられる柱穴状の落ち込みが確実である他は、明確な遺構を認めることが出来なかった。反面、3ヶ所で検出したハードローム層面では、中世造成面下から掘り込むPitや土坑状の落ち込みを確認した。しかし、極く一部の調査であるため、遺構の性格は不明である。

Cトレンチでは、中世造成面を掘り込む遺構1基、中世造成面下から掘り込む浅い溝状遺構を検出している。

遺物 根古屋地区で出土した遺物は、中国製磁器(染付1点、白磁2個体)、中世国産陶器(天目釉5点、常滑2点)、近世陶磁器(伊万里系2点、唐津系1点)、溶銅付着カワラケ片1点、カワラケ片2点、緑泥片岩片1点である。

^{註1} 1は中国製染付磁器で、口径(12.7cm)を測る小皿である。内外面口唇近くに染付で一条回線が描かれている。Bトレンチ(北)の中世造成面中位よりやや上から出土している。16世紀後半の年代である。3・4は中国製白磁で、3は口径(5.6cm)の小壺、4は小皿である。共にAトレンチ(南)の中世造成面上位から出土している。16世紀代の年代である。6は美濃産の天目釉碗で、口径(11.3cm)、底径5.2cm、器高6.2cmを測る。外面下部から高台部は露胎のままである。16世紀末の年代であるが、近世造成面上から出土している。8は常滑の大甕口縁部である。

^{註2} 14世紀前後の編年が与えられているが、近世造成層中から出土している。9は唐津系の皿形陶器の底部で、内面と外面高台外側まで赤みがかった灰色釉が施されている。胎土は赤褐色である。18世紀以降の製品で近世造成層下位から出土している。

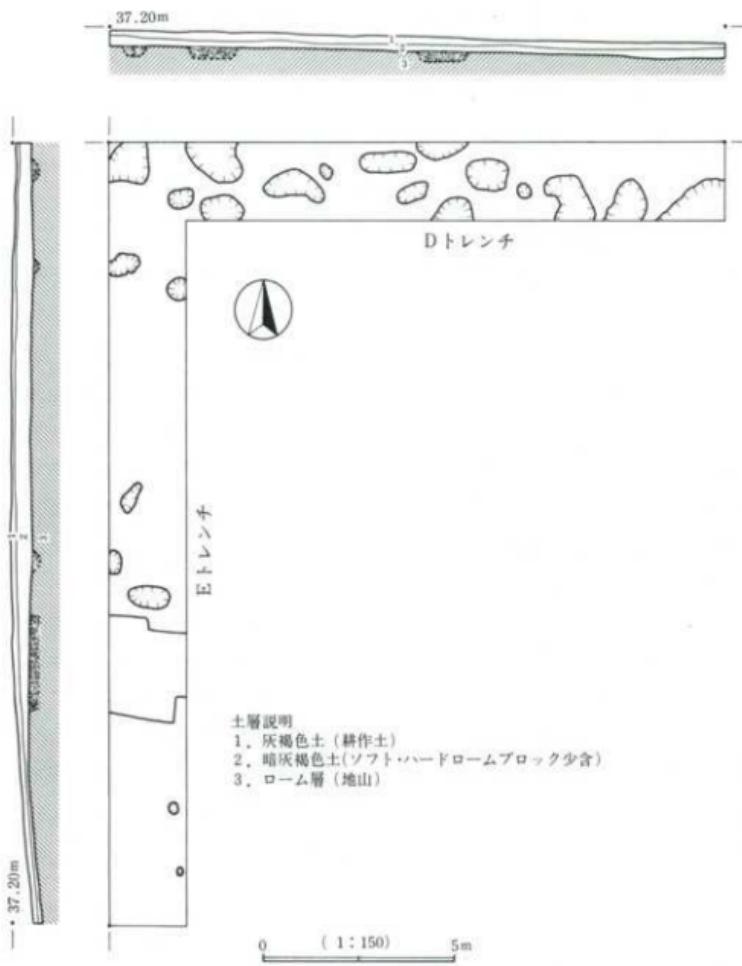
時期 近世造成層は、9の唐津系陶器や図示しなかったが伊万里系磁器が層中から出土していることから、18世紀代の造成と考えられる。中世造成層は1の染付磁器、3・4の白磁から考えて16世紀後半の造成であろう。また、ハードローム層から掘り込まれる遺構から、この面にも生活面があったが、遺構内からの遺物はCトレンチで浅い溝状遺構に密着して常滑の大甕胸部片(図示せず)が出土しているのみで、中世のある時期としかいえないが、16世紀後半の造成面とほとんど変わらない年代であろう。ただ、中世造成層とローム層の間には旧表土面的な層が認められないので、中世造成時に若干の削平があったものと思われる。

②I区

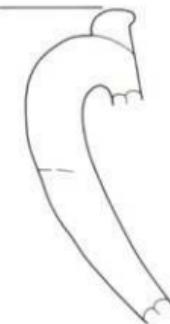
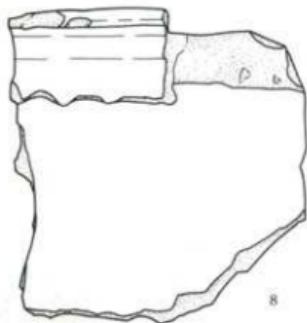
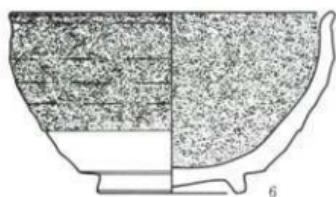
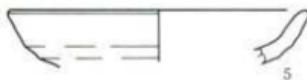
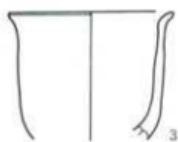
土層 現表土面から25~50cmの表土層(耕作土)下に若干ソフトローム層が残る地山面となり、造成層は認められない。

遺構 D・Eトレンチ内で、土坑あるいはPit状の落ち込みが多数検出された。時間的な制約から平面プランを確認したのみで、遺構は全て完掘していない。古墳~歴史時代の遺物が多く出土していることからも、それらの遺構の性格、時期共に不明である。

遺物 D・Eトレンチで出土した遺物は、中国製磁器(染付1点、白磁1点)、中近世国産陶器(天



I - 6 図 飯櫃城跡 I 郭発掘区平面・土層断面図



0 (1 : 2) 5 cm

I-7図 飯櫃城跡出土遺物実測図

目釉 1 点、志野釉 5 点、灰釉 1 点、鉄釉擂鉢 1 点)、カワラケ 2 点、溶銅付着カワラケ 1 点、開元通宝 1 点、綠泥片岩片 1 点である。全て表土層中出土か表採品である。

2 は中国製染付磁器の小皿底部で、高台疊付に砂が付着している。16世紀代の製品である。5 は美濃産の灰釉小皿口縁部で、16世紀中葉の製品である。7 は鉄絵志野の小皿底部で、17世紀前半のものである。10 は内面に溶銅が付着したカワラケの口縁部で、表面及び胎土は暗灰色をしている。

時期 I 区は飯櫃城跡の本丸に相当する郭内で、城跡は16世紀後半の繩張りを示しているが、出土した遺物の年代も矛盾しないものである。ただ、城跡は天正18年(1590)に廃城になったと思われているが、I 郭から細片ではあるが志野釉陶器が 5 点出土し、17世紀前半の年代が与えられることから、この時期まで利用されていた可能性がある。

註

註1 遺物番号は、遺物実測図、発掘区平面・断面図、写真図版、それぞれに対応する。

また、千葉県文化財センターの鈴木文雄氏、田形孝一氏から遺物実測図の提供を受けた。

註2 赤羽一郎 1983 『常滑』 技報堂出版

5. 結語

測量調査及び発掘調査によって得られた成果の概要を述べてきたわけであるが、それぞれの要点をまとめてみると、次のようなことがいえるであろう。

(1)測量調査

- ①西から東に延びた舌状台地先端部に占地し、台地上の城郭遺構が認められる範囲は東西320m、南北240mで、下総地域では中規模な中世城跡である。
- ②I・II郭にみられる方形張り出し部(ア)・(カ)、空堀Bの規模(平均上幅20m)、空堀Cを通らせる虎口、等の遺構から、16世紀後半の繩張りと考えられる。
- ③周辺の同時期の中世城跡(田向城跡・山中城跡・大台城跡)と比較すると、腰曲輪があまり発達せずシンプルな印象を受ける。築城時期が新しく改築をほとんど受けっていないためとも考えられる。
- ④II郭北東下に根古屋地区が明瞭に区画されている。また字「外宿」、字「宿」、III郭南下の谷津内にも城下集落を推定出来る。特に根古屋地区の字「根古屋」は、両端を土壘状の張り出し(ケ・ナ)(ニ)で防禦されていることから、ここに城主の居館があったものと考えられる。
- ⑤城跡の保存状況は良好であり、また見学しやすいことから、中世城跡を理解する上で格好の歴史資料といえる。

(2)発掘調査

根古屋地区

- ①近世造成面は、出土遺物から18世紀代の所産と考えられる。
- ②中世造成面は、出土遺物から16世紀後半の所産と考えられる。また近世造成層によって守られ遺存状況は良好である。
- ③ローム面での生活面は、若干の削平を受けた可能性があるものの、中世造成面造成時期とはとんど時間的に隔たりはないものと思われる。ただ使用開始時期は不明である。
- ④中世造成面は、発掘区内においては遺構をあまり認めることができなかった。
- ⑤ローム面では、僅な面積ではあったが、全ての調査区で遺構が検出された。
- ⑥A・B・Cトレーナーで確認したローム面がほぼ同レベルで検出されたことから、旧地形は本来から平坦に近かったと思われる。

I区

- ①I郭は、表土（耕作土）下が直接ローム面となり特に造成面は施されていない。
- ②土坑、Pit状の落ち込みが多数検出されたが、性格・時期共に不明である。
- ③17世紀前半の志野釉陶器が出土したことから、該期まで城として利用されていた可能性もある。
- ④I～III郭で中世陶磁器が表探出来ることから、台地上である程度の生活が営まれていた。

(3)まとめと今後の課題

從来飯櫃城跡の歴史については、主に『總州山室譜伝記』の記述が典拠となり、16世紀後半坂田城を本城とする井田氏の重臣山室氏が居城していたと理解されているが、今回の測量調査及び発掘調査においても、年代的に矛盾する成果は出ていない。城郭の規模・位置や存続年代を考えれば、坂田城の支城の一つであったであろう。ただ、I郭で出土した17世紀前半の志野釉陶器から、天正18年（1590）に廃城したといわれている以後にも使用されている可能性については、幕藩体制が確立するまでは完全に廃城にはならず、徳川氏の家臣が城番として在城していたものと思われる。しかし、飯櫃城は実質的には天正18年に城郭本来の機能を消失したであろう。

根古屋地区の発掘は、学術発掘調査としてはおそらく県内で初めての試みであろう。近年全国的な傾向で中世城跡の発掘が急増しているが、大部分は遺構が明瞭に認められる台地・丘陵上を対象としている。反面、城跡麓の城下集落については、明瞭な遺構が認めにくいや後世の破壊によって調査対象地として認定されない傾向がある。しかし、特殊な例を除いて中世城郭には機能を維持する上で集落は不可欠のものであり、防禦遺構の調査も重要ではあるが、それ以上に城に関わっている人々の生活跡を調査することは、中世城郭を歴史資料化するためには最も重要かつ緊急な問題であろう。今回の発掘は、幸運にも近世造成層によって中世生活

面が良好な状態で保存されていたが、残念なことに時間的制約からただ単に中世生活面を確認したに留まり、成果としては非常に不充分なものであった。しかし、これからの中世城郭調査において、意識的に城下集落に目を向けて研究を進める必要性を提起した点では大きな成果があったものと思う。

次に、中世城郭は近世城郭と違って領域内において本城一支部群体制を形成するわけであるが、そのような体制の中で、飯櫃城跡だけを取り上げて研究してみても限界がある。やはり坂田城を中心とした本城一支部群体制の中で捉えていかねばならないであろう。現段階で、城郭の同時性、個々の城郭の繩張り等検討を経ていないが、井田氏の領域の中心を形成する栗山川流域と高谷川流域の城跡分布をみると、前者は城郭の数は多いものの、一つ一つの城跡は小規模で繩張りも簡素なものが主体となる。しかし、後者は城郭の数は少ないものの、飯櫃城跡、田向城跡、大台城跡、山中城跡と中世城郭としては完成された繩張りをもち、また規模もひとり遅り大きい。このことは、栗山川流域では在地小領主層の独立性が強く、高谷川流域では井田氏の一族・重臣層に在地小領主層が統合された結果を現わしたものではないであろうか。この問題に関しては、先の検討課題を経ながら研究すべき問題といえよう。

最後に、宅地内にもかかわらず根古屋地区の発掘を承諾して下さった木内國雄氏御夫婦には心から感謝の念を表します。

写 真 図 版



飯櫃城跡航空写真(約1:13,000)



飯櫃城跡遠景（南東から）



飯櫃城跡遠景（小原子城跡から）



飯櫃城跡遠景（東から）



高谷川中・下流域（I郭ウ地点から）



根古屋地区西部（南東から）



I 郭櫓台(ア)と空堀A（南から）



空堀 A (北東から)



II 郭張り出し部(カ) (北西から)



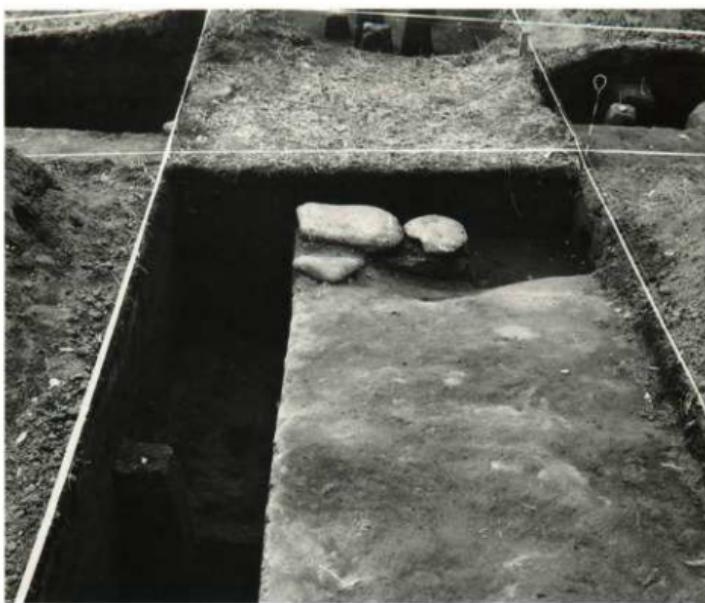
III 郭西端土塁(シ) (西から)



I 郭Dトレンチ（西から）



I 郭Eトレンチ（北から）



根古屋地区Bトレンチ（北西から）



根古屋地区Aトレンチ（南西から）



根古屋地区Bトレンチ（北西から）



根古屋地区Cトレンチ（南東から）



18

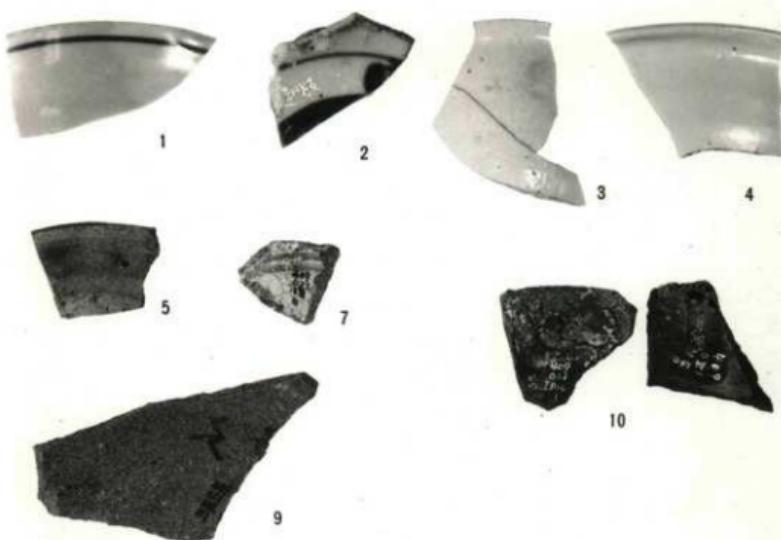
根古屋地区 A トレンチ南端検出遺構（西から）



根古屋地区 A トレンチ南端検出遺構（北西から）



根古屋地区 A トレンチ北端検出遺構（南西から）



I・II郭、根古屋地区出土陶磁器・ルツボ転用カワラケ



(天目釉碗)



(常滑表)

根古屋地区出土陶器

飯 橋 城 跡 出 土 遺 物

II 千 潟 町 鎧 木 城 跡



千潟町

II 干潟町鎧木城跡

1. 鎧木城跡の位置と地理的環境 (II-1・2図)

鎧木城跡は、香取郡干潟町鎧木字古城他に所在する。干潟町は千葉県の北東部に位置し、城跡は町の中央西寄りにある。国鉄総武本線干潟駅から北北西4.5kmの距離である。

城跡の位置は、洪積世に形成された海成の成田層群と、その上位の関東ローム層から出来てゐる下総台地の北東端に位置する。この地域は、八日市場市中心部から飯岡町まで旧海食崖が弧状に入り込み、城跡は旧海食崖の端に占地する。

旧海食崖で囲まれた地域（総武本線の北側）は、現在干潟耕地といわれる水田地帯で、江戸期には干潟八万石と呼ばれていた。干潟耕地は、実は江戸時代椿海と呼ばれていた湖を干拓したものである。

椿海は、縄文海進までに形成された海食崖に東・北・西方を囲まれ、海退と土地の隆起によつて南方旭市付近の砂洲によって取り残された潟湖である。江戸時代に入り寛文10年（1670）^{註1}頃干拓が開始されるまで満々たる水を湛えていた。干拓開始直前の状況は、東西12km、南北6kmの規模を有し、水深は一般に1.5m前後、湖北で最深3.6mあったといわれている。因に椿海干拓の面積は2,741町歩あり、江戸期では最大の干拓事業であった。

以上のように、鎧木城跡ばかりでなく、当地域の中世史を考える上でも、椿海の存在を無視することは出来ないのである。

また、旧海食崖下には水田面より7m程高位の台が帶状に続くが、これは海食台で、椿海があった時代には既に陸化していることから、この海食台と椿海の関係も無視出来ないであろう。

城跡の北側は、下総台地特有の樹枝状支谷が複雑に入り組んでいる。これらの支谷は栗山川水系に属する。しかし、城跡周辺部を除けば、樹枝状支谷はそれ程発達せず、標高40m程の平坦面が広くひろがっている。

現在の城跡は、旧海食崖線に沿つて南西一北東方向に主要な郭を直線的に並べている。郭部分はほとんどが畠となっており、耕作化や農道のため土塁や空堀に破壊が見受けられるが、全体からみれば遺存状況は良好である。現在は斜面に樹木が生茂り干潟耕地から九十九里浜への眺望は難しいが、所々樹木の間隙をついて雄大な風景を望むことが出来る。

主郭部の北側には支谷が並行して入り、字「内宿」と呼び宅地化されている。支谷の北側は城跡主郭部と同様な標高の台地となり、宅地、畠、山林等に利用されている。東側には干潟耕地から続く支谷によって区画され、西側は支谷を挟んで同様な標高の台地へと続いている。

註

註1 干潟町史編纂委員会 1975 『干潟町史』 香取郡干潟町

2. 鎌木城跡の歴史的環境 (II-1・2図)

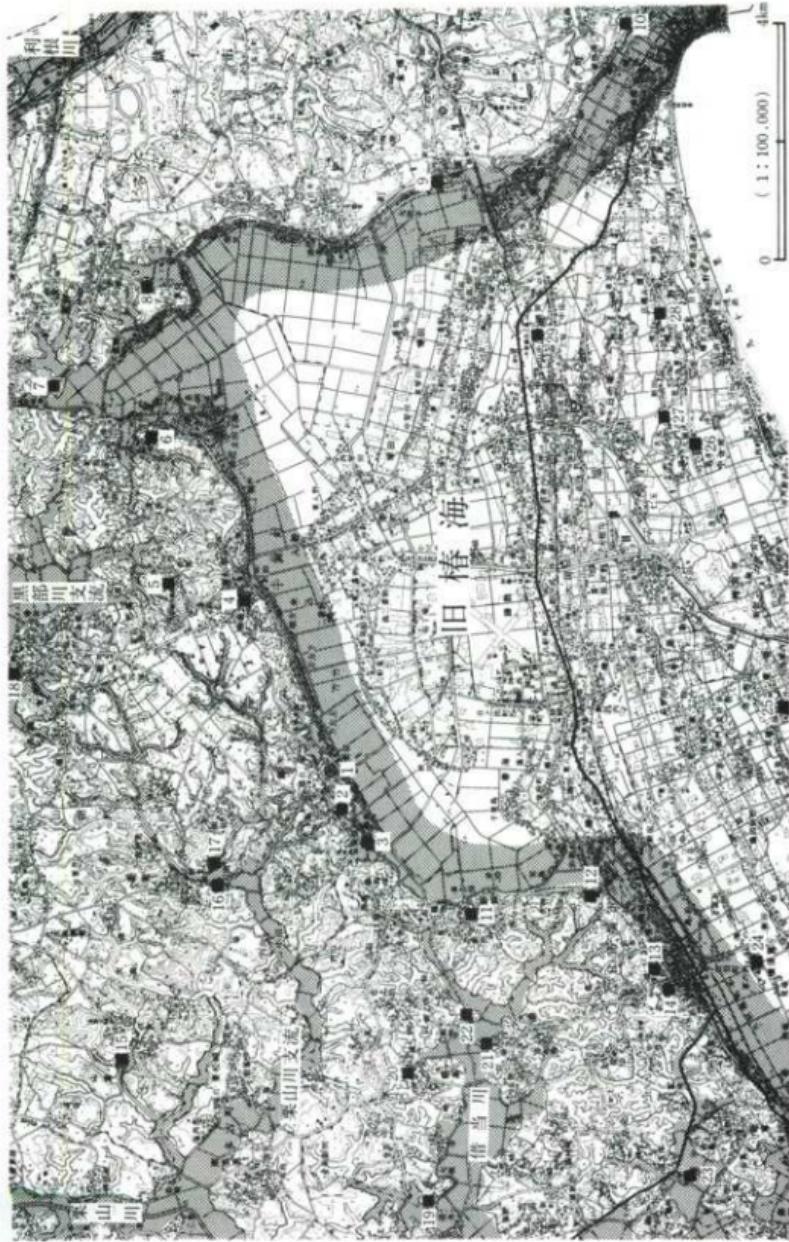
鎌木城跡の所在する香取郡干潟町は、律令制下においては当町域の大部分は下総国匝瑳郡に属していたとされる。中世には鎌木城跡周辺は匝瑳郡北条荘鎌木郷に属していた。

鎌木郷には、白井八郎胤時（千葉胤政の子）の子胤定が寛喜年間（1229～32）に鎌木郷に地頭として入封し、以後鎌木氏を称し天正18年（1590）まで在地支配を行なっている。鎌木氏は「鎌木家系図」に拠れば、胤定（九郎）—胤泰（八郎）一家胤（十郎）—祐胤（孫十郎）—胤繁（十郎太郎）—察胤（八郎四郎）—公永（駿河守）—胤元（備中守）—胤義（長門守）—胤定（信濃守）—胤家（備後守）と11代に亘っている。その中で、中世史資料で確認出来るのは、9代^{註1}胤義、10代^{註2}胤定、11代^{註3}胤家の3代である。また、「毛利文書」所収の「北条氏人數覚書」「関東^{註4}八州諸城覚書」には、「蕪木駿河守 かふらき城 三百騎」とみえる。この文書は天正17・18年（1589・90）頃に書かれたもので、小田原北条氏側の主な在地領主と城及び軍員力にふれている。下総では、千葉氏三千騎、原氏二千五百騎、高木氏七百騎、国分氏五百騎に次ぐ動員力である。なお、千葉氏三千騎は千葉衆の連合勢力であり、海上氏（銚子市中島城）、粟飯原氏（小見川町小見川城）、大須賀氏（大栄町松子城）等の千葉氏庶族が主体をなしたと思われる。

鎌木氏は、原氏、円城寺氏、木内氏と共に千葉氏四天王と伝えられ、先にみた動員力300騎からも、千葉氏の重臣として重きをなしていたと思われる。しかし、鎌木氏の支配領域は明確ではなく、個々の中世城跡の城主伝承をみても、僅に丈山砦跡（II-1図3）が鎌木城の支城として捉えられるぐらいで、周辺の城跡は他の在地領主層の支城か不明なものばかりである。ただ、動員力300騎というまとまった兵力を有するには、鎌木郷のみでは無理があり、すくなくとも椿海沿岸とその背後の台地を領域とせねばならないであろう。

近世に書かれた軍記物の「東国戦記」には、永禄3～9年（1560～66）にかけて里見氏の重臣である正木氏の東総侵入の折、鎌木氏は八日市場台で戦い敗走したと述べられている。正木氏の東総侵入は、上杉氏と小田原北条氏の関東制覇をかけた戦いの中で、小田原北条氏側の下総・上総の在地領主層に対し、上杉氏側の里見氏が仕掛けたもので、小見川城や白井城（佐倉市）等が攻められている。この間鎌木城の攻防戦の有無については不明であるが、天正18年（1590）豊臣秀吉により小田原北条氏は滅び、同時に下総・上総の小田原北条氏側の鎌木氏をはじめとする在地領主層も全て運命を共にすることとなった。天正18年以後の鎌木城には、記録、伝承とも新たに入城した者はおらず、この時点で廃城になったものと考えられる。

次に鎌木城跡（II-1図1）を中心とした周辺の主要城跡についてみてみると、西方に椎木



II-1図 鯉木城跡と周辺の主要城跡位置図
(国土地理院「八日市場」1:50,000使用)

台城跡(2), 丈山砦跡(3)があり、位置的に鏑木城の支城と考えられる。

椿海を囲む旧海食崖沿いには、南堀之内城跡(4), 長部砦跡(5), 桜井城跡(6), 大友城跡(7), 沼闘城跡(8), 見広城跡(9), 伊達城跡(10), 飯塚城跡(11), 椿城跡(12), 新城跡(13), 要害台城跡(14)等が分布する。この内、桜井城跡は文禄元年(1592)から3年間徳川氏家臣の松平家忠が在城したという。大友城跡は古代末期の下総平氏の居城といわれている。

鏑木城跡の北側まで延びる栗山川支流域には、山倉砦跡(15), 要害台城跡(16), 滝ノ台城跡(17)等が分布する。

利根川に合流する黒部川流域では、府馬城跡(18)が鏑木城跡に近い。府馬城主の府馬氏は永禄年間の正木氏による東總侵入と呼応して鏑木氏と敵対したといわれている。

借当川中・上流域には、大堀城跡(19), 飯高城跡(20), 大浦城跡(21), 内山城跡(22)等が分布する。この流域は、確証はないが飯高城主平山氏の領域であったと思われる。

(23)^の新城跡は、坂田城主井田氏の被官であった三谷氏が居城していた。城跡は南北200m, 東西60m程の規模を有し、主郭の虎口で土壘が食い違っており、虎口の形態としては新しいものである。井田氏系列の城跡には中世城郭として新しい技術が取り入れられていることが多いが、新城跡もその一つといえるだろう。

九十九里平野部に目を向ければ、椿海と海岸の間の砂丘上には、横須賀城跡(24), 東小笠城跡(25), 大城内向館跡(26), 後藤館跡(27), 堤名内城跡(28), 網戸城跡(29)等が分布している。これらの城跡は、立地上宅地や耕地化のため僅に土壘や堀を残すのみで、遺存状況は極めて悪いが、中世における平野部の開発を知るために非常に貴重な遺跡である。また、鏑木城の歴史を考える上でも、鏑木城と椿海を隔てて、水運による密接な関係が窺えられる。網戸城跡は、木曾義仲の後裔といわれる木曾義昌が、徳川家康の関東入部と共に木曾谷から移封して来たところである。城は砂丘上に築かれた平城で、椿海の南端に位置していた。木曾義昌は左遷的な移封でこの地に入部したわけであるが、城の立地をみる限り、鏑木城のごとく台地上の城から平地の城に居を構えたことは、当地においても、中世城郭から近世城郭の時代へ確実に移っていたことを示しているといえよう。

註

註1 旭市史編さん委員会 1975『旭市史第三卷』(史料番号290) 旭市役所

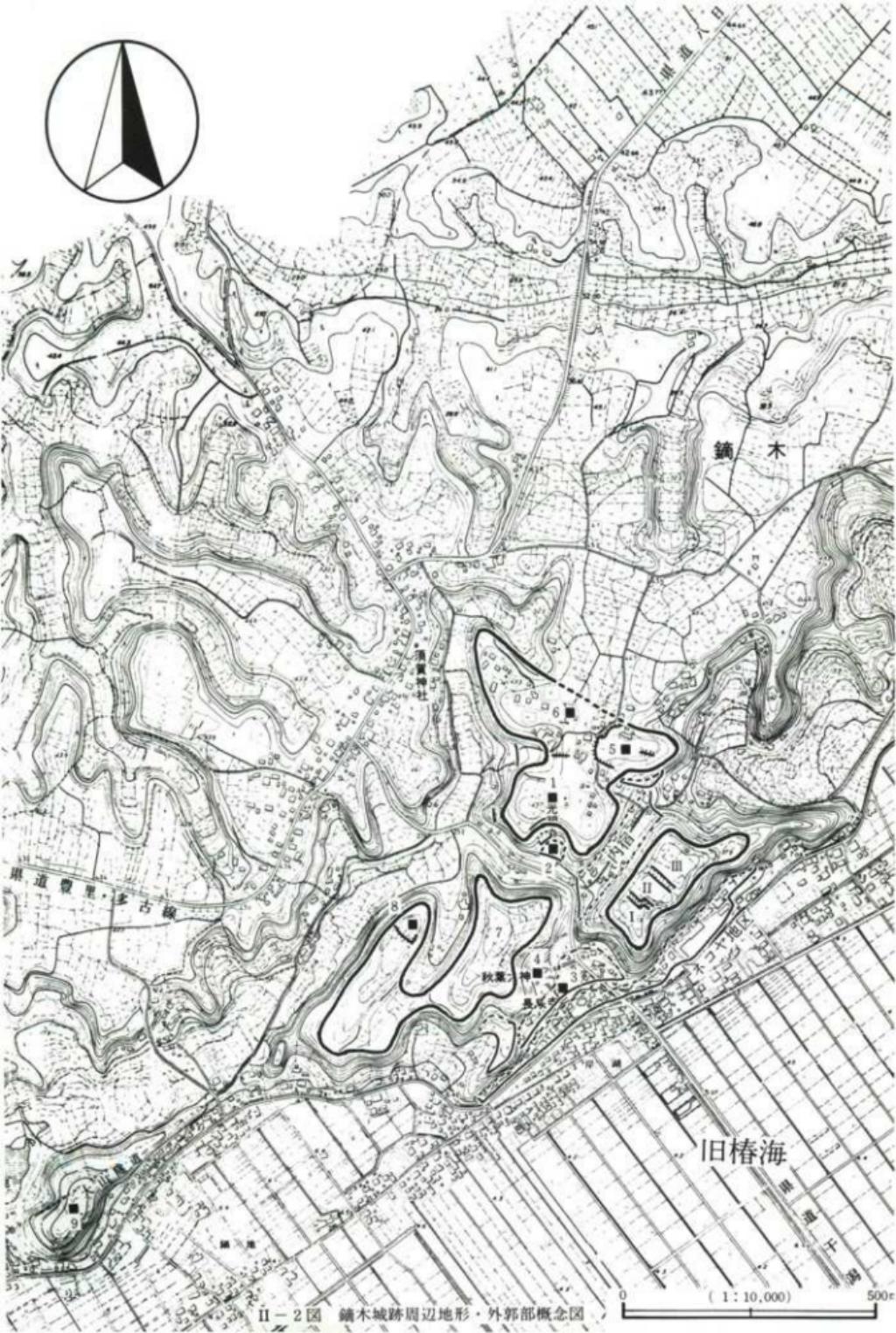
註2 註1文献(64)

註3 註1文献(240)

註4 註1文献(155)

註5 註1文献(156)

註6 「松尾町の歴史」では、松尾町内に所在する蘆木城跡と蘆木氏に比定している。しかし、戦国期の史料には蘆木氏は全く認められず、また該期の蘆木地域は井田氏の領域と考えられることから、300騎の動員力を有する蘆木駿河守は鏑木備後守胤家としてまちがいはないであろう。



II-2図 錦木城跡周辺地形・外郭部概念図

3. 鎧木城跡の概要 (II—2・4図)

鎧木城跡は、南東側を旧海食崖で、北東側を旧海食崖を開析した支谷で、北西側と南西側を栗山川流域に属する浅い支谷で、それぞれ周囲を区画されている。繩張りは大きくI～IIIの3ヶ所の郭からなり、南西～北東に主軸をもつ。規模は台地上で長軸400m、短軸160mを測る。標高は3ヶ所の郭とも44m前後で同一レベルである。比高差は、南東側水田面と38m、北東側支谷内水田面と33m、北西側字「内宿」集落内と12m、南西側は坂の中位で27mを測る。なお、I～IIIの郭は小字名は同じで「古城」という。(以下各郭ごとに述べるが、説明上方位は繁縝になるため、南東方向を「岸湖」側、北東方向を「宮田」側、北西方向を「内宿」側、南西方向を「並木坂」側と言いたいとする)

I郭

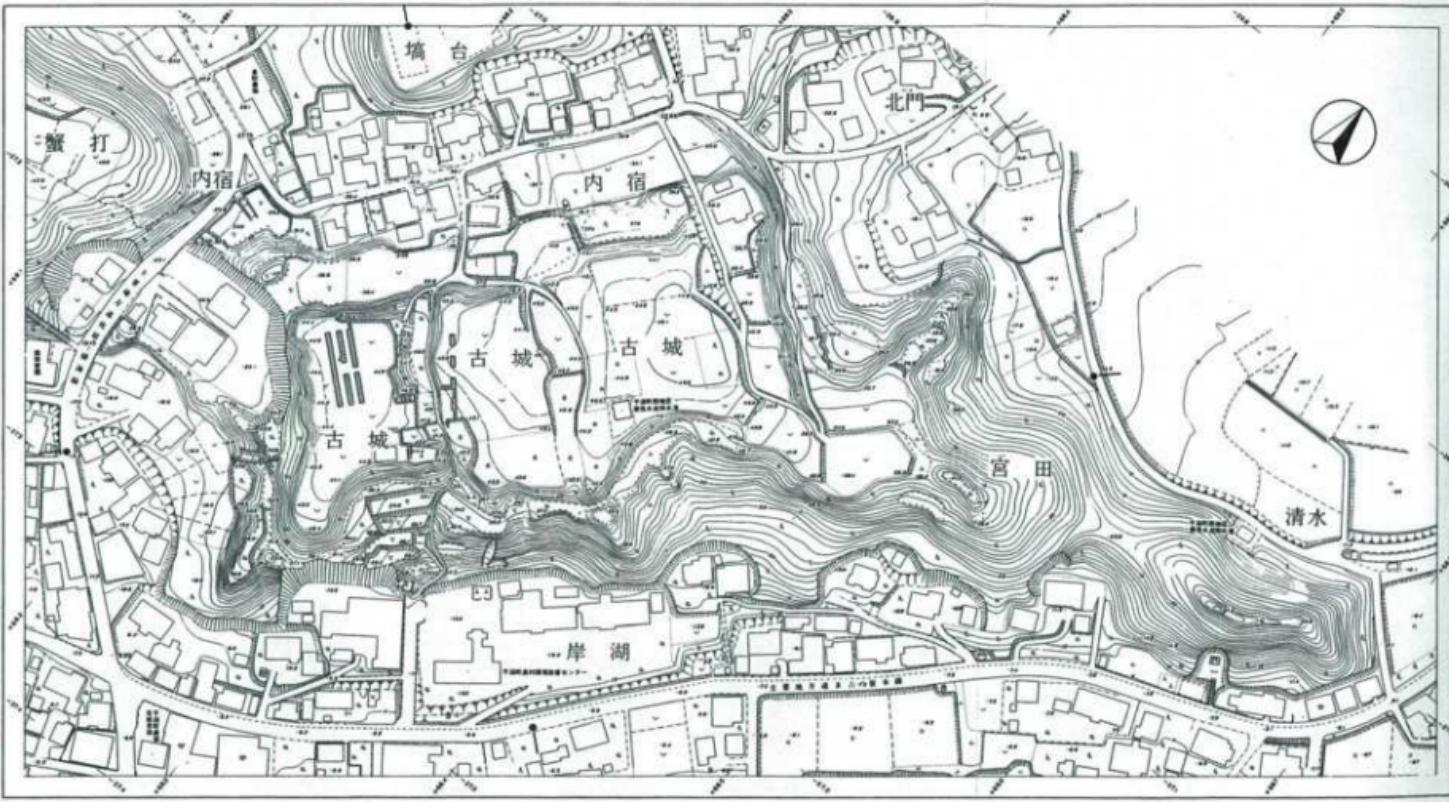
平面方形プランから「岸湖」側に大きく張り出した形を有する。「並木坂」側100m、II郭側67m、「内宿」側50m、「岸湖」側60mを測る。空堀AによってII郭と画される。四隅に櫓台(ア) (イ)と張り出し部(ウ)(エ)がみられる。2ヶ所の櫓台は上面が墓地となり本来の高さではない。特に(イ)は削平が大きいようである。櫓台(ア)の両端には土壘があり、空堀Aに沿う方は部分的に本来の形状に近いものがある。この土壘と櫓台(イ)の間は跡切れており、後世の破壊とも考えられるが、この部分(オ)で空堀Aが直角に屈曲していることから、ここに虎口があったものと思われる。張り出し部(ウ)は幅15mで30m程大きく突き出しており、I郭下の「岸湖」側と「並木坂」側の帯曲輪を遮断するようになっている。張り出し部(エ)も「並木坂」側が土取りのため不明瞭ではあるが、両側の帯曲輪での動きを牽制している。

空堀A

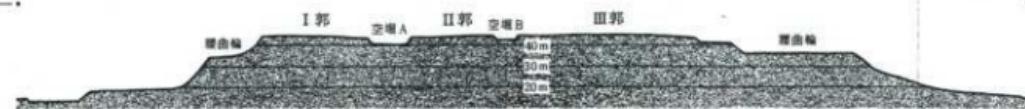
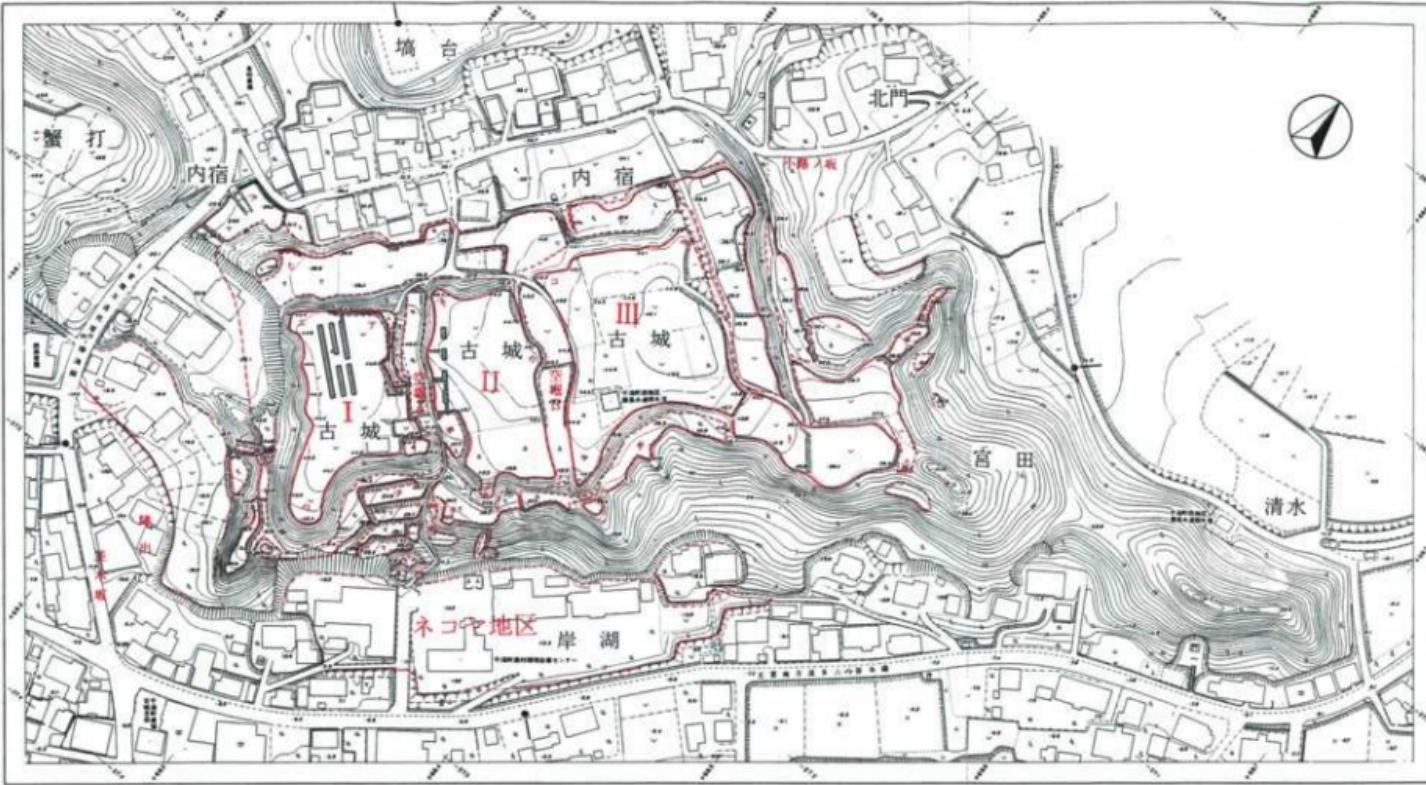
I郭とII郭を画する空堀で、両端は段差を有しながら帯曲輪へと続く。上幅12～20m、深さはI郭土壘上から5.5m、II郭から2mを測る。中央部あたりが最も上幅が狭いが、I郭土壘の消失を考えれば防禦的には問題ないであろう。I郭土壘南端でゆるく、(オ)で二度直角に屈曲する。

II郭

長軸90m、短軸48mの方形プランに近い郭である。空堀BによってIII郭と画される。空堀B中央部に向って張り出し部(カ)が認められる。幅10mで5m程突き出ている。また空堀A側の隅には張り出し部(キ)(ク)がある。(キ)はI・II郭の「内宿」側の帯曲輪から侵入しようとする敵に対して(ア)と共に牽制し、(ク)は主に「岸湖」側から登ってきた敵に対するものと思われる。郭面は(カ)の地点が最も高く空堀A側に向って緩やかに傾斜している。この点については、I郭よりレベルを下げるために削平が施された結果かもしれない。なお、縁辺部には土壘の痕跡は全く認められない。



II-3図 鶴木城跡地形測量図



II-4図 黒川城跡概念図

空堀B

II郭とIII郭を画する空堀で、両端は段差をもって帯曲輪へと続く。中央部張り出し(カ)で屈曲する他は直線的である。水道排水池や耕作化のため、現状はかなり改変されている。特に「岸湖」側はほとんど埋没し、僅に肩のラインが読み取れるのみである。現状での規模は、上幅11～18m、最も深いところでII郭側から2m、III郭側から1mである。

III郭

75m×75mの正方形プランに近い郭で、四隅に張り出し部(ケ)(コ)(サ)をもつ。張り出し(ケ)はIII郭面より若干高く、(ツ)の櫓台との間に切り通し状の狭い通路を通す。東側の隅は(ト)に続く側が耕作化で改変が激しく、(ト)をIII郭に含めるかどうか難しいが、ここでは(ト)を腰曲輪と理解した。標高は中央右寄りが最も高く45mを測り、四隅に向って緩やかに傾斜している。土壘の痕跡は全く認められない。

斜面部の遺構

I～III郭の周囲には帯曲輪が全周しており、さらに帯曲輪にはいくつかの遺構が設けられている。まずI郭の「並木坂」側からみていくことにする。(シ)では堅堀と土壘及び内側が一段高くなっている。それらの遺構の組み合わせから、(シ)から(ス)(セ)方面への虎口遺構であろう。(シ)から「岸湖」側へ帯曲輪が続き、コーナー部に削り残しの土壘(ス)と櫓台(セ)がある。(セ)から「岸湖」側に沿っても帯曲輪が続くが、(ウ)の真下は斜面崩壊のため跡切れている。

I郭の櫓台(イ)の真下あたりには、旧海食台のネコヤ地区から続く坂道の左側に5段の腰曲輪群がある。また右側にも一段の腰曲輪が認められる。坂道は「小門ノ坂」と呼ばれ、登り口を「小門」と呼んでいる。腰曲輪群(ソ)は張り出し部(タ)と共に坂を登ってくる敵に対する防禦遺構で、(チ)の堅堀は斜面横からの侵入を防ぐためのものであろうか。坂は空堀Aにつながることから、櫓台(イ)や空堀Aの屈曲(オ)も含めて、この方面からの攻撃に対して非常に警戒していたことがわかる。また反面台地上の郭(I～III)と旧海食台にあるネコヤ地区とは城側にとっても日常的に密接な関係があったのであろう。

III郭張り出し部(ケ)の下には削り残しの櫓台(ツ)が、またそれよりIII郭寄りには小規模ながら張り出し部(テ)が認められる。(ト)はIII郭に含められるべきか難しいが、ここでは腰曲輪とみている。(ニ)は1m程下がった平坦面であるが、(ナ)の高まりを考えれば空堀ともみることが出来る。(ナ)は形状及び先端方向に防禦遺構が認められず自然地形であることから、前方後円墳ではないかと考えている。とすれば、(ニ)の地点までが城域となる。ただ、(ナ)とその先端部は、見張り台の機能は果していたかもしれない。張り出し部(ヌ)は周りの腰曲輪の配置から字「北門」にあったと思われる城下集落との関係が強いようである。

III郭「内宿」側には、腰曲輪(ネ)の左端に湧水池脇から入る道(ノ)とそれに並行する土壘がある。「内宿」地区との虎口であろう。(ハ)は1.5m程長方形に低くなったところであるが、空

堀Bの続きか、虎口遺構であろうか。

I郭「内宿」側には(ヒ)の櫓台と土塁がみられる。またその下にも「内宿」集落よりは低いが土塁と段差で区画された一画(フ)がある。ここは、近世以降の屋敷地であった可能性もあり、全てを城跡遺構とするには問題もあるが、位置的に「内宿」集落の入口にあたることから、なんらかの施設があったものと思われる。

城跡及び周辺の地名

現在伝えられている小字名は、I～III郭を中心とした地区を「古城」、「古城」を中心に北に「北門」、北西を「内宿」「塙台」、南西を「蟹打」、南東から南を「岸湖」、北東を「宮田」と呼んでいる。また慶長9年(1604)の水帳(鏑木太郎家所蔵)によれば、「小路ノ坂」、「陣出」、「小門」といった城に関係した字が記されている。

城跡南東下の旧海食台上は字「岸湖」と呼ばれているが、「古城村誌」では、近世文書に記載されている「禡こや」を、やはり近世期の絵図をもとに城跡下の「岸湖」地区に比定している。この地区は、人為的に区画され、「小門ノ坂」を挟んでI・II郭と密接な関係があることや、屋号「小屋」の家があることから、本文でも「ネコヤ」地区とみている。「ネコヤ」地区がどのような性格の場所であるかは不明であるが、すくなくとも椿海を利用した水運と強い関係があったことは確かである。

字「内宿」は、地名が意味することと、後述するように「塙台」地区が鏑木城跡の外郭部になることから、ここに城下集落があったと考えられる。

鏑木城跡の外郭部(II-2図)

「内宿」地区を挟んで城跡の北西にある台地を字「塙台」という。北東辺中央部を除いて支谷によって画され、城跡とほぼ同様な標高である。この地区には、鏑木察胤(6代)建立と伝えられる願勝寺(1)や鏑木胤定(初代)建立と伝えられる光明寺(2)がある。願勝寺の南辺には一部土塁が、西辺下には小規模な空堀が認められる。光明寺の背後には腰曲輪がみられる。(5)は土塁で囲まれた平山家の屋敷地である。平山家は千鶴八万石の半分以上を押えていたといわれる豪農であり、土塁は近世に入ってから築かれたものといわれている。しかし、平山家の位置は、字「北門」との関係や、北西辺が台地継ぎになることから、防禦上重要な位置を占めることを思えば、土塁自体は後世に築かれたとしても、なんらかの防禦施設があったものと思われる。(6)は現当主鏑木太郎氏の屋敷で、鏑木氏直系の子孫の家柄である。屋号を「馬場」という。(6)と(1)の間には土塁が一部残っている。また「内宿」側には腰曲輪状の削平地が何段か認められる。

鏑木城跡は、北東、南東、南西方面に比べ、北西「内宿」方面との比高差が12m程しかなく、しかも僅な距離を隔てて同レベルの「塙台」台地があるため、城を築いた当初から、この方面は防禦上の弱点であったろう。この弱点を克服するためには、必然的に「塙台」地区を外郭に

取り入れざるを得なかったと思われる。ただ、現状の遺構をみる限り防禦的には強固とはいえない、また鏑木太郎氏の屋号が「馬場」と呼ばれていることから、防禦的には一時的な地区であったろう。

(3)は旧海食台上段に位置する長泉寺で、鏑木胤定(10代)が創建したと伝えられている。長泉寺の上には秋葉神社(4)があり、やはり鏑木胤定が創建したと伝えられている。

城跡西方の台地は、字「蟹打」というが、「蟹打」は「鍛冶打」から転化した言葉ともいわれる。鏑木城跡周辺は、古代以来の製鉄関連の遺跡が集中する地区であることから、上記の説を傍証している。また、この台地は「要害」とも呼ばれている。^{註2}踏査した限りでは、城郭遺構を認めることは出来なかったが、「要害」地名が城郭に伴う例が多くあることから、この地区は簡単な防禦施設をもった城郭であったかもしれない。^{註3}

字「蟹打」台地の西方には、南端で繋がった字「椎ノ木台」といわれる台地がある。台地北東端には椎ノ木台城跡(8)が占地する。台地を横断するよう土塁が走り、北西端では幅広く二叉に分かれる。ここは虎口と思われる。現状では土塁外側に空堀は認められない。踏査した範囲内では他に遺構は認められることから、簡単な造りの城跡と思われる。椎ノ木台城跡についての伝承は、鏑木城以前の伝承はあるものの、鏑木城に関連したものではない。しかし、位置的にみて鏑木城の支城であったことはまちがいないであろう。城跡外の台地上には別段遺構らしいものは認められないが、傾斜面は急である。

椎ノ木台城跡の南西800m程のところには、丈山砦跡がある。鏑木氏家臣の高根氏の居城と伝えられている。

「塙台」地区、「蟹打」地区、「椎ノ木台」地区は、各々強固な防禦施設はなく、かつ明確な区画はされていないが、鏑木城本体や「内宿」地区、ネコヤ地区の城下集落の防衛、並びに製鉄生産や馬場などの空間の必要性から鏑木城の外郭部として取り入れていたと思われる。

註

註1 高木卯之助 1943 「古城村誌・前編」 香取郡古城村

高木卯之助 1952 「古城村誌・後編」 古城村誌刊行会

註2 江尻和正 1986 「千葉町周辺地域」『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』 千葉県文化財保護協会

註3 古橋謙寿氏の御教示による。

4. 発掘調査とその概要 (II—4～8図)

(1) 調査方法と調査経過

発掘調査は、昭和61年10月20日から10月31日までの間で、実質11日間にわたって実施した。調査は、まずI郭内をI区、II郭内をII区とし、両区の調査区設定から行ない、順次両区共に表土から手掘りで掘り下げていった。

I区は基本的に幅2m、長さ35mのトレンチを3m間隔で設定し、西側からIA、IB、ICトレンチと名称した。実際には時間的制約からIB・ICトレンチ中央部は未掘となった。

II区は基本的に幅2m、長さ5mのグリットを5m間隔に一列に設定し、順次拡張していくた。北からIIA、IIB、IIC、IIDグリットと名称した。なお、I・II区共に郭の縁辺に並行するように設定した。

調査期間の中程から、遺構平面図や土層断面図の実測と記録写真撮影を行ない、終盤からは記録作業の終った調査区から埋め戻し作業に入り、10月31日に全ての作業を終了した。

発掘面積は、I区が200m²、II区が54m²、計254m²であるが、I区については表土層が厚く時間的制約から中世面まで掘り下げた面積は半分程である。

(2) 調査区の概要

① I区

I区の現状は畠地で、実川博氏所有地を調査区とした。

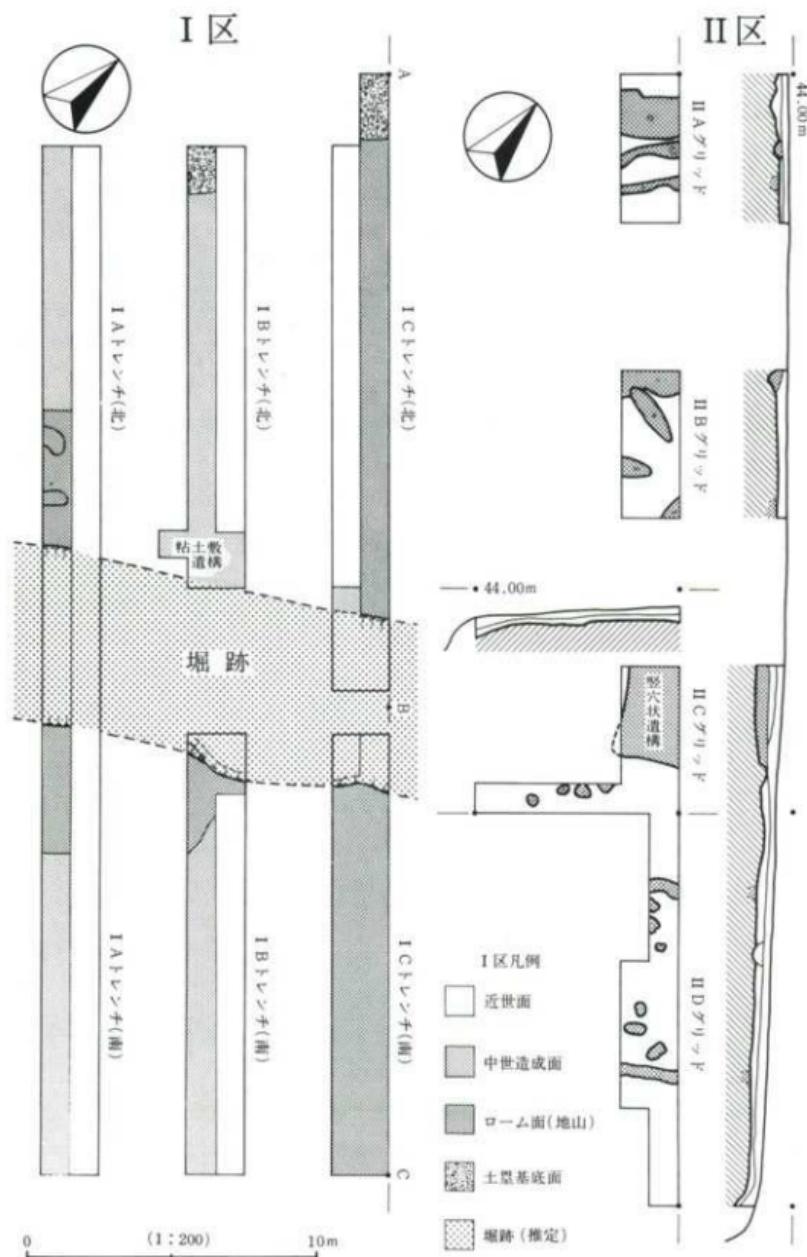
土層 通しの土層断面はICトレンチ内を実測した。まず、表土層及び耕作土が80～120cm程の厚さでみられた。通常平坦面でこれだけの厚さがある表土層は考えられないで、I郭縁辺の土壘から供給されたためとみている。

表土層下は、ICトレンチ(北)では灰白色砂土、暗灰黄色砂土、灰白色粘土等の成田層群ブロックを中心とした土砂で、厚さ20～50cmの盛り土造成層があり、その下層に地山層であるハードローム層が続く。また北端では造成層の上に固くしまった灰黄色土がのっているが、これは土壘基底部層と思われる。盛り土造成面は、遺構検出状況、遺物出土状況、土壘基底部層の存在から鏑木城最終時の生活面と捉えている。

ICトレンチ(南)では、北半では表土層下にハードローム層が続き、南半ではハードロームブロックを主体とする造成層が厚さ20cm程あり、その下にハードローム層が続く。

ハードローム層の検出レベルは、ICトレンチ(南)の方がICトレンチ(北)より平均70cm高くなっている。

遺構 IA、IB、IC各トレンチ中央部で堀跡を検出した。ICトレンチ(南)で肩より2m掘り下げたが堀底には達しなかった。他は全て肩を検出したのみである。IA・ICトレン



II-5図 鎔木城跡I・II郭発掘区平面・土層断面図

チではそれぞれ上幅6mを測る。覆土は、ICトレンチ(北)(南)で成田層及びハードローム層を主体とした版築技法状に人为的に埋められている。特に堀肩にかかる上層は非常に固くしまっており掘り下げるのに苦労した。肩はICトレンチ(北)よりICトレンチ(南)の方が70cm高位である。

IBトレンチ(北)南端では、灰白色粘土を貼った遺構が表土・耕作土直下で検出された。長軸2m、短軸1.6mの範囲に灰白色粘土とカーボン粒・灰・焼土粒を多く含む黒色・茶褐色土が認められる。西寄りで、軟質の凝灰質砂岩(飯岡石)製の石造物が直立し、周辺には同質の円礫が散乱していた。また渡来鏡と思われる鏡貨が1枚出土している。掘り方は不明瞭で把握出来なかった。周囲には、礫は認められないものの、カーボン粒・焼土粒を多く含む土のひろがりが調査区外に延びていることから、同様な遺構が他にも存在するものと思われる。

IBトレンチ(北)及びICトレンチ(北)の北端では、造成面が特に固くしまった範囲が認められた。縁辺の土壘に近いことから、土壘基底面と考えられる。

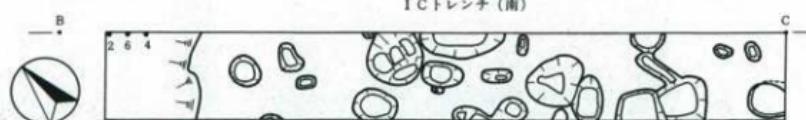
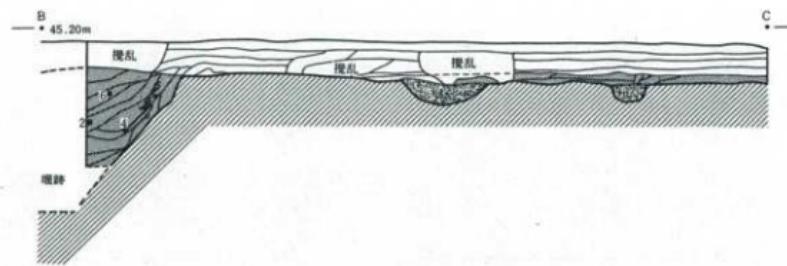
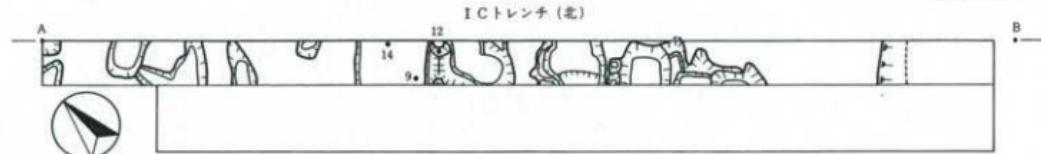
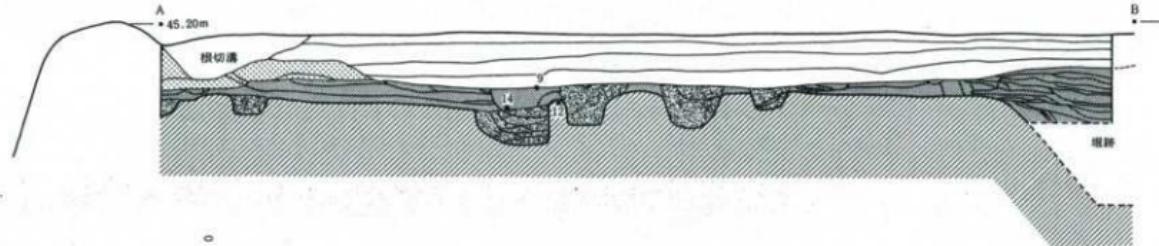
ICトレンチ(北)では地下式坑、土坑、柱穴を、ICトレンチ(南)では土坑、柱穴を検出した。ICトレンチ(北)ではトレンチ軸に若干ずれて柱穴が一列に並び、堀跡の方向に直交するようである。両トレンチとも造成面から掘り込む遺構とハードローム層から掘り込む遺構がみられ、最低2時期に分かれる。またICトレンチ(北)の柱穴は、(南)の柱穴に比べ大形の掘り込みである。

IA・IBトレンチで造成面まで掘り下げたところは、時間的に精査をする余裕がなかったため遺構の有無については確認していない。

遺物 I区からの出土遺物には次のものがある。中国製磁器(白磁3点、青磁1点)、国産中・近世陶器(天目釉碗8点、美濃・瀬戸灰釉5点、鉄釉擂鉢3点、常滑1点)、瓦質火舎・内耳鍋20点、カワラケ16個体(IAトレ3、IBトレ1、ICトレ12)、金属溶解物付着カワラケ33点(IAトレ1、IBトレ1、ICトレ31)、繩文土器20(三戸式1、田戸下層式11、田戸上層式7、諸磯a式1)、鏡貨3(中国鏡3)、石造物及び石片5などである。

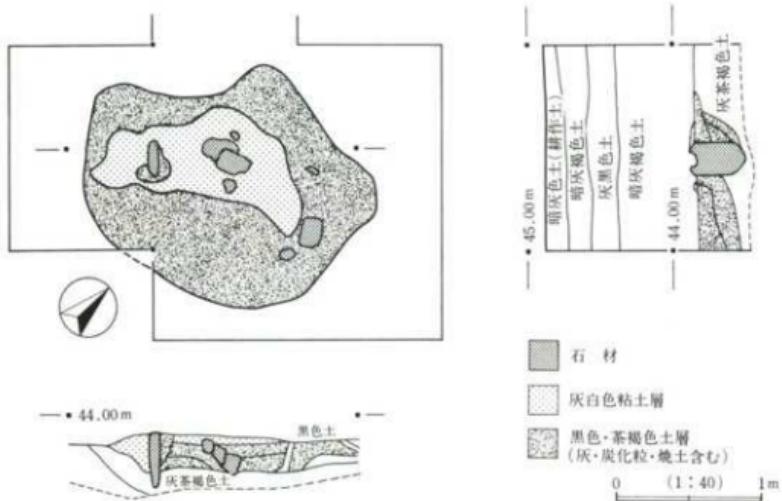
1・2は中国製白磁である。(遺物番号は挿図、写真図版、発掘区平面・土層図全てに対応する)。1はICトレンチ表土層中の出土で、口縁が外反する小皿であり、16世紀代の製品である。2は口縁部が面取りされた小壺あるいは小碗であろうか。15世紀前半の製品であろう。3は中国製青磁で、小盤の口縁部である。16世紀代の製品であろう。4~7は国産陶器で、4は瀬戸灰釉瓶子の口の部分である。断面に漆が付着している。13~14世紀の製品であろう。5は美濃・瀬戸の天目釉碗の口縁部、6は美濃・瀬戸の灰釉小皿の口縁部で、共に16世紀中葉~後葉の製品である。2・4・6はICトレンチ(南)の堀跡覆土中から、3はIAトレンチ表土層中、5はICトレンチ表土層中から出土している。

8~12は右回転ロクロ成形のカワラケである。8は底径5.0cm、胎土は砂粒で固く、色調は内



II-6図 鎌木城跡 I Cトレンチ平面・土層断面図

0 (1:100) 5m



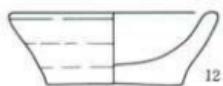
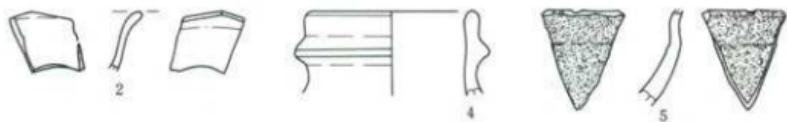
II-7図 鎌木城跡 I Bトレンチ検出粘土敷遺構実測図

外面共に暗灰色を呈す。底部は回転糸切後未調整である。内面に金属滓が部分的に付着する。また断面にも一部みられることから、口唇部が破損後使用に供されたものと思われる。IAトレンチ表土層下部からの出土である。9は口径(12.0cm), 底径(5.6cm), 器高3.7cmを測り、胎土は砂粒で固い。色調は内外面共に暗灰色を呈す。内面全面に金属溶解物が付着し一部ガラス化している。外面も口唇部近くに付着している。ICトレンチ(北)造成層最上位からの出土である。10は口径(10.0cm), 底径(4.2cm), 器高3.1cmを測り、胎土は砂粒で、内外面共に淡赤褐色を呈す。口唇部にススが付着する。底部は回転糸切り後未調整。IAトレンチ表土層下位から出土している。12は口径(7.2cm), 底径(4.7cm), 器高2.5cmを測り、胎土は砂粒で金雲母粒を含む。内外面共に黒褐色を呈す。二次焼成を受けたため器面が剥落しやすい。底部は回転糸切り後未調整のままである。ICトレンチ(北)中央部の地下式坑入口部からの出土である。

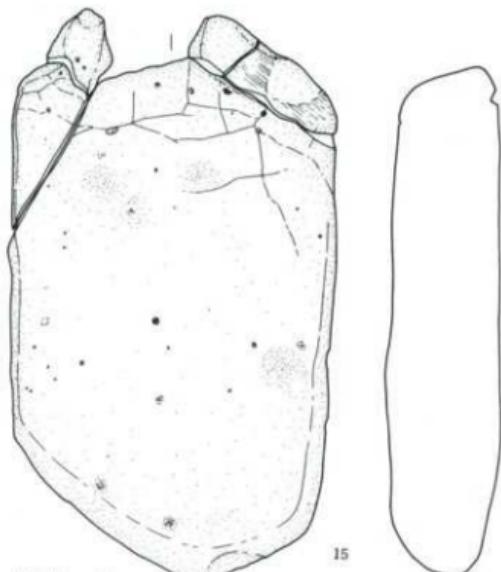
13・14は中国錢で、13は至和通宝、14は永楽通宝である。14は文字の周辺はところどころ貫通している。13はICトレンチ表土層下位、14はICトレンチ造成層中からの出土である。

15はIBトレンチ(北)南端で検出された粘土敷遺構中から直立した状態で出土した石製品である。軟質の凝灰質砂岩(飯岡石に似ている)製で、上端から4cm程人為的に抉られている。また、側面も全て加工が施される。縦38.7cm、横22.3cm、厚さ7.9cmを測る。上端から10cm程の範囲まで二次焼成を受け淡赤褐色に変色している。

ここでは遺物を図示していないが、ICトレンチ(北)造成面上から出土した金属溶解物付着



0 (1 : 2) 5cm



II-8 図 鎔木城跡出土遺物実測図

カワラケ（内面に付着し、表面は赤色にガラス化している）1点について、国立歴史民俗博物館助教授永嶋正春氏に蛍光X線分析定性分析をお願いした。その結果、金属元素に限っていえば、鉛が半分以上占め、他に銅、錫、鉄が含まれていた。また赤色のガラス化している部分は銅が還元されたところである。

②II区

II区の現状は畑地で、椎名寛氏所有地を調査した。

土層 厚さ50cm程の表土層下に直接地山層であるハードローム層が続く。II Eグリッド南端では地山層が黄褐色粘土層や灰白色粘土層となる。

遺構 耕作化が地山層まで達していることもあり、検出した遺構は全て地山層面で確認している。検出遺構全てについて、壁際に沿ってサブトレーナを入れた他はプランを確認したのみで、性格・時期等不明である。ただ、II Cグリッド検出の方形プランの遺構は、サブトレ内底面直上で常滑系の甕細片が3点出土したことから、中世の竪穴状遺構と思われる。またII Eグリッド南端、II Cグリッド西端の空堀A肩部近くでは、土壙の痕跡は認められなかった。

遺物 出土遺物は全て表土中のものである。国産中世陶器（天目釉壺？2点、美濃・瀬戸灰釉1点、鉄絵志野釉1点、鉄釉擂鉢1点、常滑2点、常滑系3点）、カワラケ3点、繩文土器（田戸下層式1点）等が出土している。中国陶磁及び金属溶解物付着カワラケは出土していない。

7は鉄絵志野釉小皿の口縁部で、17世紀前半の製品である。11は右ロクロ成形のカワラケで、口径（11.0cm）、底径（5.5cm）、器高2.6cmを測る。胎土は砂粒で良好である。色調は内外面共に暗赤褐色を呈する。底部は回転糸切り後未調整のままである。

5. 結 語

鍋木城跡の測量調査及び発掘調査で得られた成果について述べてきたが、ここで改めて要点をまとめてみると以下のことがあげられるであろう。

(1)測量調査

- ①鍋木城跡は旧海食崖縁辺に占地し、台地上で400m×160mの規模を有する。
- ②I～IIIの3ヶ所の郭からなる直線連郭式の城郭である。
- ③I～III郭の下には帯曲輪、腰曲輪が全周している。
- ④各郭の四隅にはほとんど張り出し部が認められる。
- ⑤旧海食台上のネコヤ地区とは密接な関係があり、また椿海との関係も重要視される。
- ⑥台地側の防禦上の弱点を補う意味で「塙台」地区、「蟹打」地区、「椎ノ木台」地区が、明確な区画ではないが、外郭部として取り込まれていた。

(2)発掘調査

- ①I区中央で、人為的に埋め戻された上幅6mの空堀が検出された。
- ②I Bトレント(北)で、鍋木城最終面或いは廃城時面で粘土敷遣構が検出された。
- ③I Cトレント(北)(南)で、埋め戻された堀跡に直交するように掘立柱建物址と思われる柱穴群が検出された。
- ④I Cトレント(北)北端で土壘基底層を、I Bトレント(北)北端で土壘基底面を検出した。
- ⑤I郭は中世において盛り土造成が施されていた。特にI Cトレント(北)では、版築状に厚さ50cmに及んでいる。
- ⑥II区では、II Cグリッドで中世竪穴状遣構が検出された。
- ⑦II郭空堀A沿いには土壘の存在を確かめることができなかった。
- ⑧出土遺物は、中世に限ってみれば、少量ながら中国製磁器、国産陶器、カワラケ等があり、陶磁器の年代は高級品の伝世を除けば、概ね16世紀後半が主体を占める。
- ⑨金属溶解物付着カワラケがI Cトレント(北)を中心に多く出土した。

(3)まとめと今後の課題

上記の測量調査及び発掘調査の成果を合わせて考えてみると、鍋木城跡は文献史料でいわれてきたように、16世紀代には機能し天正18年(1590)に実質的に廃城になったと思われる。そして、当地域内では技巧に富んだ繩張りをもつ城郭であることが判明した。また、新たに外郭部やネコヤ地区の存在が明確になったことは大きな成果といえよう。外郭部には城下集落や寺社ばかりでなく馬場も取り込まれていたようであるが、外郭部を含めた広い範囲を城域として

意識していたことは、鍋木城下にある程度の人々の集住があったことを意味しているのではないだろうか。さらに、ネコヤ地区を通じて椿海と密接な結び付きが考えられることは、椿海の水運や九十九里平野砂丘上の在地小領主層との結び付きに繋がるであろう。

I 区で検出された空堀跡は、廃城時の繩張り以前に I 郭が二分されていたことを意味する。空堀跡は I 郭の北西部に片寄り過ぎていることから、I 郭内はもっと細分されていたかもしれない。しかし、I 郭の居住性が高まったために埋められ生活面に利用されたと思われる。

I 郭と II 郭とでは、II 郭内の発掘区が中央部ではないため厳密な比較は難しいが、I 郭には盛り土造成面と掘立柱建物群の存在が認められるが、II 郭には両方とも認められないことから、I 郭と II 郭では郭の機能・性格の上でかなり違っていた可能性がある。

金属溶解物付着カワラケはルツボとして転用されたものである。製品が出土していないため何を作ろうとしたかはわからないが、容量が小さいため小型の製品（たとえば鉄砲玉）であったことは確かである。

今後の課題としては、筆者の怠慢から外郭部の踏査及び調査が不徹底なため完全には捉えられていない。また周辺の中世城跡もほとんど踏査していないため、鍋木城跡との比較検討が全く出来なかった。比較検討の作業を行なっていけば、今まで明瞭でなかった鍋木氏の支配領域もある程度は明確になってくるものと思われる。その過程で他の中世城跡外郭部の有無についても比較すれば、鍋木城跡外郭部の機能・性格等もより確かなものとなろう。さらに鍋木城の前面に広がっていた椿海との関係も今後に残された問題であろう。

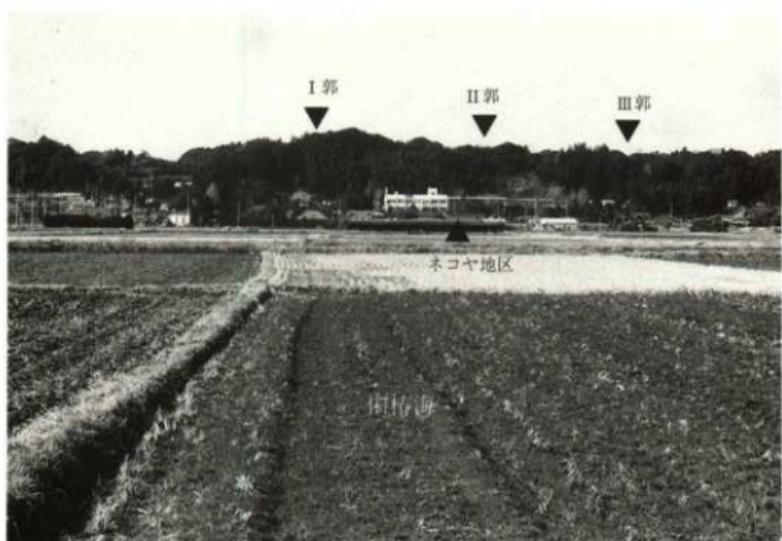
鍋木城跡は、天正18年（1590）以後は廃城になったため、近世においてほとんど改変されておらず、戦国時代末期の繩張りを色濃く残しているといえよう。当時の在地領主層の支配構造を知る上で又とない歴史資料である。

最後に、本論を書くにあたって鍋木太郎氏には様々な御教示を得た。感謝の念を表します。また、高木卯之助氏著の『古城村誌』は大いに活用させていただいた。高木氏が独力で著され、主に戦前に調査されたものであるが、全ての時代にわたって、史・資料の収集・分析方法やフィールド調査の徹底さには驚嘆せざるを得ない。現在でも資料価値は少しも衰えていない村誌である。

写 真 図 版



鍋木城跡航空写真（約1：13,000）



鏡木城跡遠景（南東から）



干潟耕地(田椿海)北西部 (I郭ス地点から)



空堀 A (南東から)



空堀 A 屈曲部 (南西から)



空堀 B (北西から)



I C トレンチ・北（南東から）



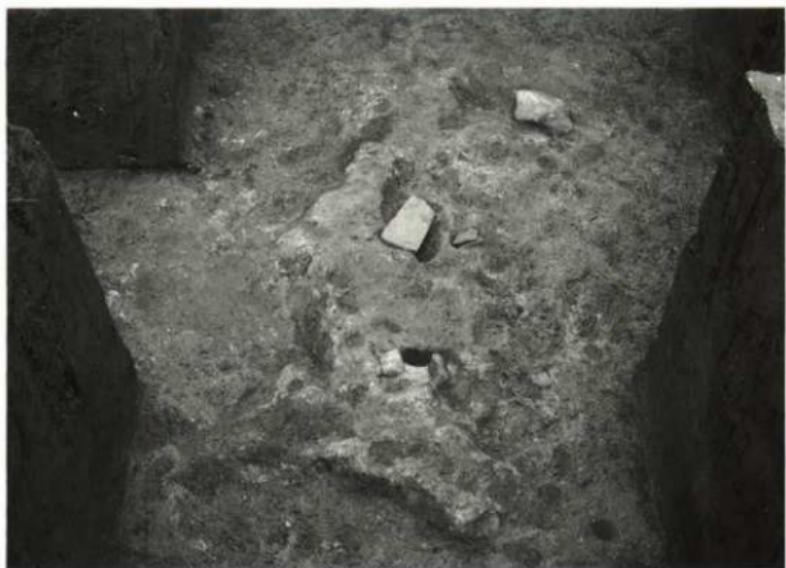
I C トレンチ(北)南端検出空堀跡（南西から）



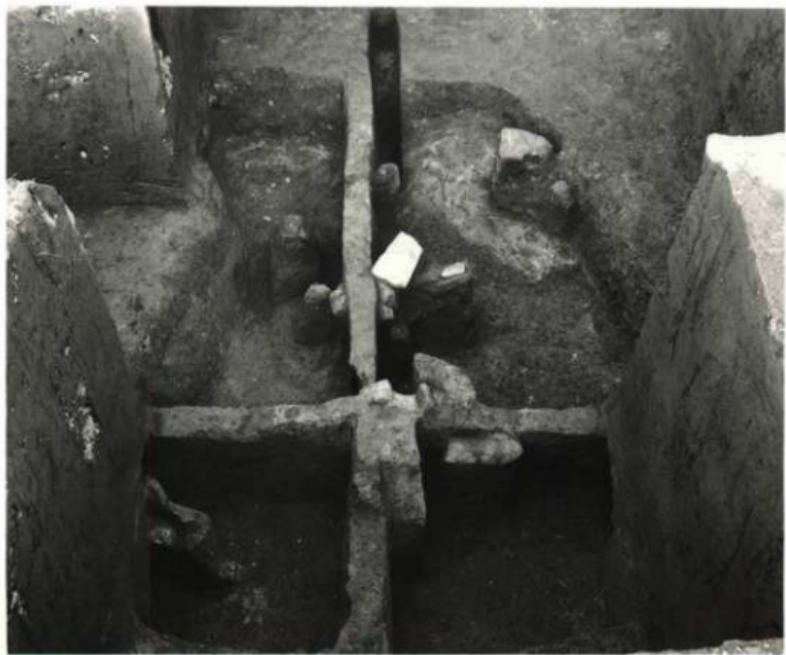
I C トレンチ・南（南東から）



I C トレンチ(南)北端検出空堀跡（南から）



I B トレンチ(北)・粘土敷遺構検出状況（北東から）



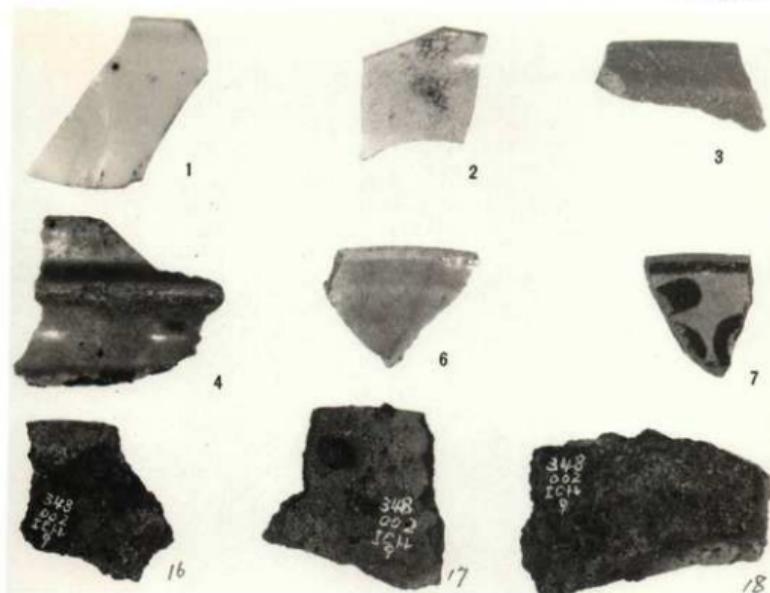
I B トレンチ(北)・粘土敷遺構掘り方状況（北東から）



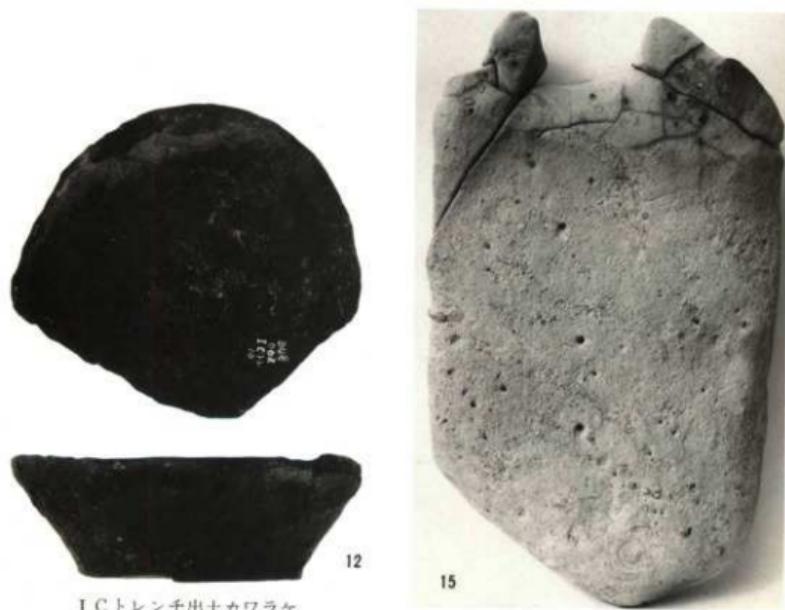
II郭調査区（南から）



II郭調査区（北西から）



I・II 郡出土陶磁器・ルツボ転用カワラケ



I C トレンチ出土カワラケ

I B トレンチ粘土敷構出土石製品

千葉県中近世城跡研究調査報告書 第7集
—飯糰城跡・鍋木城跡発掘調査報告—

昭和62年3月31日発行

発行編集 財団法人 千葉県文化財センター
千葉市葛城2丁目10番1号

印刷 有限会社 正文社
千葉市都町2丁目5番5号
